



東海支部報

日本山岳会東海支部

No. 180 Jan. 1. 2025

発行 公益社団法人
日本山岳会東海支部

〒460-0014 名古屋市中区富士見町8-8 OMCビル

電話：052-332-8363 FAX：052-322-7924

郵便口座 00800-5-13749 「日本山岳会東海支部」

銀行口座 三菱UFJ銀行 覚王山支店

普通1222073 「日本山岳会東海支部」

編集 星 一男

印刷 (有) アジマプリント



メラック(Merak)峰(写真の左側)初登頂 詳細本文P3参照

目 次

○年頭のご挨拶	高橋玲司	2	○身柄付補導委託登山	杉山雄彦	20
○第15次インドヒマラヤ登山隊			○東南アジア・インド紀行Ⅲ	田中 進	22
メラック峰初登頂	星 一男	3	○朝明ミーティング開催	田中 進	26
○上高地ー楽しい歴史話(4)	和田豊司	7	○登山用具あれこれ⑭	千葉泰丈	27
○ゴザフェス2024開催	山下大貴	10	○同好会コーナー		28
○ボランティア委員会‘24年秋	前田隆久	11	○委員会報告 写真山行		30
○山行委員会だより	稲葉真英	12	○支部友コーナー	金谷正起	31
○猿投の森づくり20年	和田豊司	14	○会務報告	今津英一郎	32
○山岳名著の旅	西山秀夫	15	○ルーム日誌・会員異動	今津英一郎	34
○技術向上委員会講習会開催	清水克宏	19	○INFORMATION		35
○写真展実行委員会			○編集後記		
写真教室開催	岩月邦文	20			

年 頭 の ご 挨拶

支部長 高橋 玲司

新年あけましておめでとうございます。新年を迎えるにあたり、ご挨拶申し上げます。

昨年を振り返りますと実に多種多様な活動が実施されています。第一に国内外での活発な登山成果です。中でも星 一男隊長率いる第15次インド・ヒマラヤ隊（メラック峰6481m初登頂）の成功は久し振りのうれしいニュースです。

沖総隊長、星隊長の熟練コンビのお手柄です。高所順応もうまくいき、隊員の2名の登頂は大きな成果です。このことは、インドヒマラヤでの長年の継続の蓄積が大きな力となっていると感じています。

また、亀の会での富士山登頂もビッグニュースです。用意周到な計画と準備の上の成功は、今後の高齢者登山の大きな希望となるでしょう。

昨年度ユースを再編成しましたが、トレッキングクラブ、アルパインクラブそれぞれの特徴ある活動をしていただきました。アルパインクラブは、冠山東陵厳冬期初登攀の成功や、韓国山行などその内容は、バラエティーに富むものでした。

猿投の森づくりの会も20周年を迎え盛大に記念式典が催されました。活動もますます円熟味を増し今後の盛会を期待するばかりであります。

各委員会の活動も活性化しています。

支部友会の取り組みにより、支部友の入会しやすい環境を作っていただき、会員獲得に大いに貢献してもらっています。登山学校や山行委員の企画山行にも多くの支部員が参加し、その内容と個々のスキルの高さは驚きを感じています。

技術向上委員会の講習会も活発で、企画の良さが光ります。また、自然保護委員の環境保全に向けた活動、写真展実行委員会では、今年度の写真展の開催に力を注いでもらっています。そして、ボランティア委員会の多岐に渡るボランティア活動等々、皆さんの活躍振りには、頭が下がる思いです。遭難対策委員会では全計画書のチェックを行っており、



安心して山に行ける指導をしてもらっています。

若手育成として東海学生山岳連盟を設立して10年以上経過しますが、ゴザフェスに始まり冬山の企画をするなど活動も盛んで順調に若手の育成もできていると感じます。

少々の心配事は、会員数の漸減傾向です。少子化による人口減や、会やグループに所属するのを嫌う風潮など社会現象も原因の一つといえましょう。時代の流れと言ってしまうかもしれませんが、なかなか特効薬がありません。仲間を増やすように皆さんでご友人などへのお声掛けを是非お願いします。

このように活性化している支部の中で、一つ残念なことがあります。それは、折角入会してもほとんど支部活動に参加せず支部を去ってしまう人がいることです。

こうした人達に対しては、まずは積極的な委員会への参画勧誘や委員会のPRが必要です。更には、各委員会が単独で行動するばかりではなく、委員会同志が連携したり、共同の企画を催すのもよいでしょう。

要は、支部員（新入会員）が、支部活動は、面白そうだなと感じてもらうことが肝要なのです。

さらに活性化した東海支部と成る事を祈念し、年頭の挨拶に代えさせていただきます。

今年も一年安全登山には留意し、楽しい登山活動を行いましょう。

インド北西部 中印国境地帯の未踏峰 Merak 峰初登頂成る

第15次インド・ヒマラヤ隊 沖 允人 星 一男

Merak峰, 6481m初登頂。〈メラックは地元の神が宿るという意味〉男性5名、女性2名内6名はヒマラヤ登山経験者。登山終了後、印パ国境のシアチェン氷河探査。

日本山岳会東海支部第15次インド・ヒマラヤ登山隊は、2022年の14次隊でMerak峰登山許可が得られず、カン・ユーセイ山城の未踏峰に転戦し、2座登頂した。昨年夏には、沖総隊長がMerak峰の偵察を行い、登頂の可能性を探った。

昨年11月に、15次隊のメンバー編成を行い、隊員会議を再開し、IMFに再度登山申請を行う。約半年後の5月末に登山許可を得ることができた。このエリアでは、5年ぶりの外国からの登山隊とのことである。

登山地域はインド北西部の中印国境地帯にあり両国にとって重要な国境地域である。

ラダック地方(Ladakh)の北部に位置し、海拔4300mのチベット高原にある塩湖であるパンゴン湖(Pangong Tso)の南に横たわる約200kmの山脈で、6000m峰が50座以上あるパンゴン山脈である。パンゴン湖は、約170kmの横に長い湖で中間に中印国境未画定線が走っている。

ラダックとは現地の言葉で「雪嶺を越えて」という意味である。パンゴン山脈に接近するには、ラダックの主都レー(Leh, 3500m)から軍用道路を走行し、チャン・ラ(Chang La, 5300m)という峠を越して車で2日かけて行った。ラダック地方は、チベット文化が色濃く残っている地方で、チベット族が多く住み、チベット語方言のラダック語を話している。

登山の目的としている山は、パンゴン山脈の中央部にある標高6481mの未踏峰で、メラック(Merak)と呼ばれている。メラックは地元の神が宿るという意味で、パンゴン山脈で最後に未踏で残っている名前のある万年雪に覆われたどっしりした三角形の山である。マリ峰(Mari, 6451m)からパンゴン山脈最高峰のカ



登山口付近からメラック山群を望む

ンジュ・カンリ(Kangju Kangri, 6725m)に続く主脈上の高峰である。

パンゴン山脈東端に近いタンツェ(Tangtse, 3800m)という村から西に約80km進んだパルマ(Parma, 4300m)という集落の上方に位置している。登山基地(BC)となる地点は標高約4600mの荒れ地である。

マリ峰(Mari, 6451m)、マーン峰(Maan, 6351m)などが登頂されているが、重要な国境地域であるため、登山許可の取得は大変困難で、5年間ほど外国隊の登山許可は発行されていない。

登山隊組織

ベテランから中堅まで含む男性5名、女性2名の隊で、内6名はインド・ヒマラヤ登山経験者である。北アルプスの雪山や富士山や御嶽濁河高地トレーニングセンターなどでトレーニング山行を実施した。

この隊は、日本山岳会東海支部の第15次インド・ヒマラヤ登山隊で、これまでのインド・ヒマラヤ登山の経験を基に、準備をすすめた。なお、現地の協力隊員として、ヒマチャル州マナリ(Manali, 2700m)にある西ヒマラヤ登山学校(Western Himalayan Mountaineering Institute)のインストラクター3名が加わる。

「もう一つのインド」を求めて

登山隊員は、登山終了後、特別許可を取得し、印パ国境のシアチェン氷河(Siachen Glacier, 5000m)を訪れたり、ガルワール(Garhwal)山麓や南インドの旅をし、「もう一つのインド」を味わった。

登山隊名簿(7名)

総隊長 沖 允人(89)
隊長 星 一男(73)
登攀隊長 栗木洋明(70)
隊員 印藤寿浩(65) 印藤義子(65)
久米 瞳(42)
協力隊員 長谷山 薫(ヒマラヤ協会)(78)



BCのキッチンテント、隊員のテント

登山隊の行動 (概要)

9月9日(月) セントレア空港→羽田空港→
インディラガンジー空港でデリーに着く
10日(火) 日本大使館訪問、IMFでブリーフ
ィング・リエゾンオフィサー紹介
12日(木) マナリーに向け出発
13日(金) エージェントのメンバーと合流
登山装備の点検
15日(日) Manaliを出発し、Keylongで宿泊
16日(月) レーに向け出発 5000mを超
える峠を4つ通過し、夜にレーに到着した。
高所順応と装備等の追加購入を行う。
19日(木) Durbukに向け出発
20日(金) DurbukからParma(BC)へ移動
し、BCの最適地と登山ルート of 調査、軍
用ロードでもあるためか、高所の山道でも
アスファルト舗装されている。BCは、軍
の要請もあり、Parmaの農家の庭先に設営す
る。

21日(土) C1設置場所を偵察

23日、24日(月) はC1まで、高所順応を
兼ねて往復する。

24日と25日(水) C2を設置する

26日(木) BCからC1に入りテント泊をす
る。

27日(金) C2に移動しテント泊をする。

28日(土) 全員登頂目指し、6時5分に出発
する。13時に2名登頂し、16時45分にC2
に戻る。

29日(日) 全員BCに帰還する。

10月9日(水) IMFと在インド・日本大使
館に登頂報告

10月19日 デリー発羽田空港経由セント
レア空港経由で帰宅した。

登頂記録

以下の記録は、帰国後隊員会議をもち、ま
とめたものである。記録の整理は沖総隊長と
星が担当した。

9月26日

BC(4600m)からC1(5200m)に移動す
る。



C1から Merak 山群を見る

9月27日

全隊員は、C1を出発し、C2(5581m)に
移動する 氷河の水で食事をとる予定であつ
たが水質が悪く、水はBCより荷揚げとなる。

9月28日

全隊員は、C2を午前6時05分に出発し、山
頂に向かった。栗木登攀隊長は体調が思わし
くなく、標高6000m付近で登頂を断念した。ま
た、印藤義子隊員と久米 瞳隊員は、登攀意欲
は十分であったが、登頂のルートが大変困難
で時間切れになりそうだと判断したので、安



C 2 (5581m)

全を期し、山頂に向かうのを断念した。

栗木登攀隊長と久米 瞳隊員は、共にBCに戻り、印藤義子隊員はC2に泊まった。

星隊長と印藤寿浩隊員はメラック主峰(6481m)を目指し、登攀を続行し、インド人スタッフの3名とともに、13時に山頂に立った。晴天であったが強風が吹いていた。頂上直下に達したが、雪面の下部が固い不安定な氷となっていて、クレバス等も確認し、これ以上進むのは大変危険と判断。この地点を山頂とすることにし、記念撮影などを行った。

16時45分に全員がC 2に下山して、宿泊した。

9月29日

朝食後、テント等をまとめC 2を出発。

C 1を經由してB Cに下山した。前日までの登攀に限界に近いほど精力を使ったので、下山とはいえ、大変体力と気力を使い消耗した。

都合よく、タンツェから沖允人総隊長と長谷山薫隊員がB Cに到着し、全員がそろった。また、前日にカンビールが上がってきていたので、全員が登頂の美酒としてカンビールで乾杯した。

沖と長谷山はタンツェに帰った。そして、シアチェン氷河の探査に向かった。

登山隊はB Cで撤収作業をし、Drubukで



氷河上の固い氷を登攀中

Photo by Indian Staff



登頂の写真・左より Namgyal・印藤寿浩隊員・星一男隊長・Piyush
photo by Nishant

2泊し、10月3日にチャン・ラ経由でレーに下山した。その夜は、レーのYaktail Hotelに全員が集まり、Success Partyを行った。

その後、登山隊は装備の整理などの帰国準

備をし、デリーに移動する。

BC設営地は軍の演習所の中

BC設営の場所は、インド軍との話し合いにより、当初の登山口より下方の地となった。BC設営時から、軍のトラックの往来があり、BCの四方の丘の上には、軍のテントの数が増え、10月からの演習に備えた段階であると認識できた。登山口への行き帰りも、日本の東富士演習場の中を行き来している雰囲気、緊張することも度々あった。

インド人スタッフ

Liaison officer: Gajendra Deshmukh

Indian Staff:

Chief Guide: Namgyal Negi

Guides -cum- HAP :Piyush Sharma, Nishant
Thakur, Jaspal Rana

B. C. : Mayank Sharma

B. C. Assistant Manager: Rageev Shashni

Cook: Manish Thapa,

Kitchen helpers: Tenzin and Ajay



IMFで登頂報告



IMFのダイレクターと挨拶

パンゴン山脈にあるMerak峰(概念図)

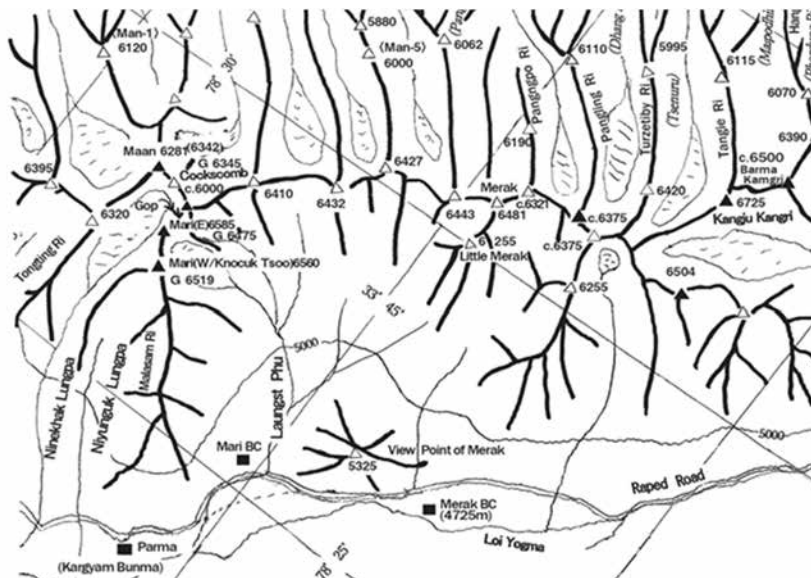
全メンバーの集合写真

IMFに登山結果の報告

10月9日(水)の午前中に、IMFを訪問し、新任DirectorのCol Madan Gurung (Ret d.)氏に登頂報告を行ない、「初登頂」の記録が認められた。IMFの年報「Indian Mountaineer Number 60, 2024」に報告文が掲載される予定である。

注記事項

地名、標高は現地での実地調査およびOlizane Mapによった。



上高地 ーちょっと楽しい歴史の話(4)ー

池田遊紀 著 解説 和田豊司

6. 河童が住んでいた上高地？

明治のころ、地質学者や陸地測量の人達、有名無名の登山家や民俗学者がこの雄大な上高地を初めて目にした時、その感激を書に著し、その感銘を人に語ります。

人が住むより、神こそが主人公——とばかりこの地に相応しいのは「神河内」「神降地」だ。いや「神高地」「神合地」「神垣地」がいい。諸説紛々、神冠名が踊ります。

金田一京助、柳田国男といった学者まで巻き込んだ賑やかさ、ついに地元安曇村では、「上高地」から「神河内」への名称変更の願いを出します。

願いは却下されました。だから、いま「上高地」です。



現在の河童橋

江戸時代、杣人が木の伐採事業に従事していた頃、今の場所には「河童橋」はありません。少し上流、今の小梨平の辺りでしょうか、広い河原に石を積み。そこに板を並べて渡るそんな橋、「与九郎橋」大水で板が流されると又作り直しです。その作業の組頭が与九郎だったのでしょう。上高地にはその沢その尾根に、難しい名が観られます。

太兵衛（平）、八右衛門（沢）、善六（沢）、又四郎（又白谷）、長平衛（長堀山）などは当時の元締めや杣頭の名をとったものです。「六百年」も山から切り出す材木の石数からのようです。



善六沢扇状地に建てられた JAC 研究所建屋

「河童橋」、その名の由来についても、諸説が飛び交う時代がありました。

橋が無い時、ここを訪れた人は、濡れては困る衣類を頭に載せて、膝をまくり上げ、こわごわ川を渡る、その前かがみの姿が「河童」に見えた、だから橋ができた時「河童橋」と名が付いた、と。

初代の「河童橋」は明治の二十四年の頃か、といわれています。丸太を組み上げる、（ハネハネ）橋です。狭い溪谷に、木の丸太だけを用いて橋を架ける古来からの方法、橋桁はなく、場所は今の河童橋辺り。

橋は幾度となく架け替えられます。明治後期には、ワイヤーを用いた吊橋になったようです。

川幅が狭く架橋しやすい場所、当然流れは急で大きな淵もある、そこに「河童が棲んでいた？」

河童伝承は日本各地に伝わりますし、特に淵の近くは、「あそこには河童がいるから近寄ってはいけないヨー」と子供たちを諭す。大きな淵が“河童淵”と言われても不思議ではありません。

上高地の、そのような深い淵に架けられた橋だから「河童橋」、別に奇異な話ではなく、当然の流れのようです。

この辺りの立派なカラマツの林、春の新緑、秋季の黄葉、上高地ならではの風景ですが、これは大正時代から昭和にかけて植林された人工林です。

江戸時代の伐採事業であらかたの木は切られてしまいました。防災の意味もあったでしょう、景観の回復の目的のひとつだったかもしれません。“一面ガラガラの河原だったー”といわれたこの辺り、「次の年には、半分くらいは枯れた」と。ウサギやカモシカに新芽をやられてしまうことも多く、決して楽な作業ではなかったようです。

今樹齢九十五歳から百歳といったところ、立派に育ちました。

戦中戦後、やはり上高地も閑静な時代です。登山者も観光客も途絶え勝ちです。

昭和三十五年の事、後にさまざまな波紋を広げることになるある遭難事件がおこります。冬季前穂高岳での事でした。

登山、特に岩壁に登攀する際のザイルは、「麻縄」が主でしたがこの時、三人のパーティーは初めて「ナイロンザイル」を用意します。

厳冬の穂高、冬季未登の東壁、前夜岩壁で仮眠したその朝、トップの一人が頭上の岩角にザイルを掛け、登攀開始。事件はその時起こります。

ちょっと足を滑らせ、振り子のように身体が振れたその瞬間、ザイルはあっけなく切断、墜落、行方不明。

なぜわずか五十センチばかりの滑落でザイルは切れてしまったのか？

「ナイロンザイルは何から何まで麻ザイルに勝る」「特にショックに強くートンにも耐える」といわれ、切れるはずのない新商品でした。しかし切れた！

メンバー（三重岩稜会）は最初の簡単な実験をします。「ナイロンザイルは、岩角に極めて弱い」その結果を新聞に発表します。すでに何件かのザイル切断遭難事故も発生しており、多くの登山者への警告の意味もその目的でした。

しかし世の中やはり複雑怪奇、ある著名な国立大学の教授が登場します。ザイルメーカーの用意した立派な装置を使い、報道陣をはじめ多くの関係者の見守る中で、公開実験をしたのです。

その結果は新聞や山岳雑誌に大きく報道されました。

「ザイルは切れなかった！」と。

「ヒマラヤでも南極でも使われている、そんなに弱いはずがない」「結び方を間違っただけではないか」そんな主張が渦巻く中での公開実験だっただけに、岩稜会の立場は悲惨でした。

一方仲間によって懸命に続けられていた遺体捜索はその夏、現場から三〇〇メートル下の雪渓で発見、勿論切れたザイルは体に結ばれたまま凍りついていました。

しかし、その著名な教授、当時山を志す人達の聖書とまで称された日本山岳会発行の「山日記」に、その経過報告「ナイロンザイルは十三メートルの墜落で切れない」と署名入りの記事を発表してしまうのです。

遭難発生から約一年後の事でした。

7. 井上靖・「氷壁」

岩稜会の壮絶な戦いが続きます。遭難現場の、ザイルを掛けたその岩をそのまま石膏に取るまでして、実験を重ねます。しかしやはりザイルは切れてしまうのです。

幾度かの公開質問状を送りますが、教授からはなしのつづて、訴訟も起こしますが、ことは進展しません。

同時に岩稜会はこのいきさつを「ナイロンザイル事件」という経過報告書にまとめ、当時の粗末なガリ版刷の小冊子を報道機関に配布します。

この一冊が作家「井上靖」氏の目にとまる事になります。これが小説「氷壁」の始まりでした。

靖氏はある文章でこう述べています。「私が初めて穂高の大きい自然に触れたのは、昭和三十一年九月である。上高地から穂高に登って、涸沢で観月の宴を張った。一行は五人、帰途、一人からザイル事件の話を聞いたことが、小説“氷壁”を書く直接のきっかけになっている」。靖氏と岩稜会のメンバーとのつながりは同じ十一月からの事です、朝日新聞での「氷壁」の連載が始まります。

後に靖氏は「“でも実際に切れたんですから”という短い言葉を繰り返しているだけの青年の目にいささかの濁りもなかった」とその心情を語っています。「私は“氷壁”を遭難者の立場から書いた」とも記されています。

社会的に注目を集めていた事件だけに、物語と、現実の事件の推移とが交差するという、常にはない流れをたどります。作者にとっては大変な苦労の日々だったことでしょう。

この連載は、多くの読者を魅了します。「朝、新聞が来るのが待ち遠しい！」そんな逸話が残っているほど。連載は翌年八月まで続けました。



新潮社版「氷壁」 井上靖



石岡繁雄・相田武男 著

小説の最後のストーリー。

ナイロンザイルの切断で友を失った主人公（魚津）は、皮肉にも公開実験をした主人公の妻（美那子）を慕う自分のところに悩みます。一方穂高で失った岳友（小坂）の妹（かおる）は魚津を慕っていました。

死んだ岳友に伝えるためには、かおるとの結婚しかないと思った魚津は、美那子への思いを断ち切るため、穂高でも最も困難なコース、厳冬の滝谷に入る決意を固めます。

夜の新宿「上高地の徳澤小屋で待っています」とかおる。

「別の人となってあなたと結婚します」と、魚津。発車のベルが鳴る。

昭和三十三年“氷壁”は映画化されます。妖

艶な人妻に山本富士子、教授には上原謙、ザイル切断で雪渓に滑落死する小坂役には川崎敬三、最後滝谷登攀中に死亡する魚津役に菅原健次、降りしきる小屋の窓越しにひたすら、もはや帰らぬ婚約者を待つ、野添ひとみ。

この映画、大変なヒット作品になります。同時に大変な数の登山者や観光客が上高地を襲うことになります。二回目のブームです。すこし当時の新聞の記事を紹介しましょう。

「めったに、景気が良いといわない山の業者も、笑いが止まらない」

「バスも旅館もスシ詰めで、いくら増発、増築を急いでも、間に合いそうにない」

「このブーム映画“氷壁”のせいですよ」
確かに多くの人が訪れるようになりました。

話、「ザイル事件」に戻します。

あの教授が「あの公開実験、山とは無関係、船舶、グライダーに関する実験であった」との談話を発表します。山とは無関係という事からか、鋭利な岩角は、「ほんの一ミリほど、丸くけずってあった！」ウソのような本当の話が、公になります。

四十八年の事、新たな「公開実験」が準備されます。

実験装置は岩稜会の装置が用いられました。各種のザイル、自然石も用意され、真相究明を求める関係者、自衛隊、各地のレンジャーなど総勢百三十名、その注視の中で実験は行われました。

問題のナイロンザイル「九十度の角度、五十センチの滑落」で見事に切断されてしまいました。

勿論テレビ新聞はこの結果を大きく報道します。これを機として、国（旧通産省）もザイルに関する「安全基準」を設定。ザイルメーカーも岳連の機関紙に陳謝を表明します。

日本山岳会発行の「山日記」三十一年度版のザイル記事について、その遺憾の意が表記されたのが、五十二年版の事でした。

“二十一年目の真実”ある新聞はそう題して記事を締め括りました。

<解説>

登攀用ロープとして卓越した性能であるナイロンザイルの特性をメーカーもユーザーもまだ理解していない時代の悲劇でした。今、8mmのナイロンザイルをシングルで登攀に使うクライマーはいません。

さまざまな歴史を積み重ねてきた上高地、最近「上高地もすっかり変わったね」と語るお年の方が多くなりました。

旅館やホテル、目を見張るほど立派になりました。新しい公共の施設も出来ました。散策の道筋も栈道が組まれ、ひと昔の面影、確かに無くなりました。

しかしこの大きな穂高、そして梓の清流、樹々の豊かさ、立ち枯れの数も少なくなってしまった大正池ですが、焼岳の姿を湖面に映しています。

将来「上高地」にどのような変化が訪れるのか、確かなことはわかりませんが、この豊かな「自然」がいつまでも元気でいてほしい、そんな願いを込めて「歴史の話」ここで終わることにしましょう。(中日新聞上高地支局 池田遊紀)

【参考文献】穂苅貞夫「播隆」、横山篤美「上高地物語」、川村宏・他「ウエストン年譜」、嘉門次小屋編「三代の山」、徳澤園編「椎の木は残った」、上條武「上高地」などの文献を参考にさせて頂きました。

8. あとがき (和田豊司)

2023年7月9日、池田遊紀(2023年11月逝去)氏の御子息の了解を得て原稿用紙に記された原稿をワード化しました。山岳関係紙(営業用の出版でなければ)への公開も了解して頂いています。原稿は西暦2000年頃起草されたものを託されました。学校の同窓のよしみでしょうか。池田遊紀は長期間中日新聞上高地支局の管理人として上高地を見守ってきた生き字引でした。

文中の注記、コメント、写真の挿入は原文にはありません。

ゴザフェス 2024 開催

東海学生山岳連盟 山下 大貴

9月28日、29日御在所フェスティバル(ゴザフェス)が開催された。

今年のゴザフェスは1日目は講習壁や一壁でクライミング講習会と懇親会、2日目はクライミング組が前尾根と中尾根(雨の影響によりヴィアフェラータなどに変更)から登る、一般登山組が中道、本谷から登り山頂にて集会し記念撮影。



藤内小屋での集合写真



御在所自然学校にてセルフレスキューの講演会

山頂では遭難救助に携わる警察官の小古真也氏によるセルフレスキューの講習会を行なった。

クライミング講習会や懇親会では世代関係なく交流の輪が広まったと感じた。また、2日目のセルフレスキューの講習会では、怪我人が発生した際に身近の道具を使って怪我人を効率的に運ぶ方法を学んだ。

参加者は南山大5名、名大7名、名工大3名、愛知学院大3名、摂南大2名、京産大1名、関西大1名、その他全国各地から合計50名集まった。

充実した 2024 年秋のシーズンを振り返る

ボランティア委員会委員長 前田 隆久

2024年秋のシーズンは天気にも恵まれ、予定していた全行事が実施でき、委員会にとっては充実したシーズンだった。

秋のシーズンに向けての、9月14日(土)・15日(日)の「尾鷲・オハイ委員会合宿」を皮切りに、SON愛知との「山岳会と一緒に登山」、秋の「ひまわり登山」、「揖斐合宿&ひまわり登山」、名古屋家庭裁判所との「タンポポ登山・身柄付き補導委託登山」、秋の「ブラインド登山」、自由ヶ丘幼稚園との「親子のふれあい登山教室」、瀬戸少年院との「少年登山」、初冬の「ひまわり登山」の、すべての公式行事が、事故もなく無事開催された。

10月、11月、12月に行われた委員会行事をまとめて紹介する。

1、SON愛知「山岳会と一緒に登山」=SON愛知のアスリート(知的障がい者)との登山

10月12日(土)、公共交通機関を使つての登山に切り替えて4年目となり、今回は名鉄善師野駅に集合して名鉄可児川駅までの鳩吹山ミニ縦走コースで登った。

アスリート4名、SON愛知関係者3名、東海支部員12名が参加。晴天で、快適な尾根歩きを楽しんだ。

2、秋のひまわり登山=支部員、支部友のブラインド登山者(視覚障がい者)との登山

10月14日(祝)、車3台に分乗して、奥美濃・母袋烏帽子岳へ登った。東海支部員14名(内、ブラインド登山者5名)が参加。紅葉にはまだ早かったが、ミズナラ、シラカバの美しい尾根歩きが楽しめた。

3、揖斐委員会合宿&ひまわり登山=ボランティア委員会と、ひまわり登山参加のブラインド登山者との、親睦合宿。

10月19日(土)・20日(日)の二日間で、1日目は、「まるけふあーむ」での稲刈り体験と揖斐・小島山山麓のウォーキング、夜は「もり



秋のブラインド登山・奥三河鹿島山

なり」で懇親会、2日目は、美濃・鍋倉山登山と、盛りだくさんの内容で開催された。

東海支部員15名(内、ブラインド登山者4名)、その他関係者12名が参加して、美濃の秋を楽しんだ。

4、タンポポ登山=名古屋家庭裁判所の試験観察中の少年との登山

11月1日(金)、試験観察中の少年と家裁関係者7名、東海支部員7名で、猿投山に登山。途中から小雨がパラついたが、大きな問題もなく無事終了。

5、秋のブラインド登山=支部員、支部友のブラインド登山者と一般公募のブラインド登山者との登山

11月3日(日)、名身連の大型バスで、ブラインド登山者11名(内、一般公募のブラインド登山者6名)、東海支部員23名、その他1名が参加して、三河・鹿島山に登った。

急な登山道の連続で、結構、手こずったが、無事終了。山ヒルには悩まされた。

6、親子のふれあい登山教室=自由ヶ丘幼稚園、親子との登山

11月9日(土)、第一、第二、第三自由ヶ丘幼稚園の園児と親、職員合わせて89名、東海支部員14名の合計103名で、鈴鹿・尾高山に登った。4、5箇所、荒れて危険なところがあり、

ロープを渡したり、メンバーを配置して対応。事故もなく、無事終了。

7、瀬戸少年院・少年登山＝瀬戸少年院在院中の少年との登山

今年から、委員会行事として行なっているもので、瀬戸少年院を退院間近の少年との登山。第一回目は、11月14日(木)瀬戸少年院の少年と職員4名、東海支部員3名で、猿投山に登山。

8、初冬のひまわり登山＝支部員、支部友のブラインド登山者(視覚障がい者)との登山

12月1日(日)、東海支部、支部友12名(内、ブラインド登山者4名)で、車3台に分乗、美濃・今淵ヶ岳へ登山。

紅葉真っ盛りで美しい山であったが、数箇所登山道が荒れている箇所と、危険な箇所があり、思ったより登るのに時間がかかった。

下山に時間がかかるのを想定し12時の時点で引き返すことにして、840m地点で昼食休憩後、下山。結果的に、計画書通り14時11分に無事下山、駐車場に到着した。

ひまわり登山のメンバーだからなんとか安全に登山できたが、公募のブラインド登山では無理な山であった。

委員会が目指してきたものは、昨今、よく言われる共生社会の実現で、老若男女、障がいのある人も、ない人も、全ての参加者が楽しく、全ての参加者に優しい山登りである。障がい者も、少年も、園児も、支援者も、参加して下さった全ての人たちの「楽しかった、また、一緒に山に登りたい」の声が、ボランティア委員会で活動しているメンバー



SON「山岳会と一緒に登山」・鳩吹山



初冬のひまわり登山・美濃今淵ヶ岳鉄塔広場にて

の大きなモチベーションとなっている。

そのような、同じ思いの多くの人に、支えられて行なっているボランティア委員会の活動。2025年も、委員会のみならず、多くの人たちに参加していただき、ボランティア登山を行なっていきたいと思っています。

山行委員会だより

山行委員会委員長 稲葉 真英

築谷山山行記(中学生支部員)

金山駅の近くのビルに集合して、高速道路で下呂まで行き、しっかりした道を30分ほど走った後、入った沢沿いの林道奥にある駐車場で車は停まった。

僕だけ重めの登山靴をもってきていたので、登山靴を駐車場ではなくことになり、愚だっ

いと準備体操をすることに。ラジオ体操をしたあと、ここで登山道が何度曲がるなど、普段からやっていなかったコース確認をする。石畳を少し登った先にある東屋の奥の分岐を左に曲がり、少しだけ紅葉した樹林帯をずっと登っていくと一時間ほどで「子鹿の涙」という立派な石碑がある滝に着いた。この滝で

5分程の休憩にするそうだ。滝の水を飲んでみたがかなりおいしかった。

休憩の後すぐにあったトラバースで苦戦しているとき、石田リーダーが足を谷側に向けるとすべりにくいと教えてくださり、楽に感じる。その後30分ほど樹林帯を登ると急に尾根に出る。足どりが軽くなり、登っていると、辺り一面ものすごく丈の長いススキだらけになった。そろそろ頂上のようなのだ。これまで全く展望がなかったのだからちょっと期待する。



しかし、頂上についてもススキに囲まれて何も見えない。「山座同定」をやる予定だったと聞いたが、周りの景色がほとんど見えないのでできない。残念だったが、これまで木に隠れていた空が高く見え開放感があった。頂上には20分ほどいるそうなので、昼ご飯のパンを食べることにする。

休憩が終わって下山開始。下山をはじめて数十分ほどで木がちょうどなく展望がいい場所に出た。山頂でみはらしが悪かったのでここで休憩をする。遠くに御嶽山が一段と高く見え、かなりいい場所だった。

休憩を切り上げ、下り始めると一緒に登っていた山田さんが下山中に木が倒れてきたという嘘みたいなお話をされて、かなり驚いた。さらに下って行くと沢に出て、その沢沿いに下ると最初に左に曲がった分岐に着いた。静かで楽しい支部山行だった。

(萩原 侑紀)



幻の宝剣を求めて

季節外れとも感じなくなりつつある11月の台風の影響もあり、当初日程から一日後ズレし我々の宝剣探しの旅は始まった。

金山6時半出発。豊田隊長のインサイトを「極めて適切な」ドライビングで予定より一時間早く登山口へ到着。

大峰山系の神秘的で静寂な森林、村井隊員の熊鈴が修験者の持鈴を彷彿させる。我々はその雰囲気をもものとしめない、世間話のオンパレード、常に笑いの絶えない状態を維持しつつ、宝探しに突き進む。

我々の宿营地である稲村山荘に13時30分に到着。隊長判断で我々の宝剣アタックは一日早まった。

先頭を任された五島隊員が、宝剣を見逃す手痛いミス！しかし、中島副隊長、村井隊員のサポートにより宝剣は見事に発見されたのだった。



宿营地である稲村山荘の番人は元小学校校長で75歳。この地の情報には精通している。

稲村ヶ岳の名前の由来を知りたい方、見事な紅葉とススキの絨毯を堪能されたい方は来年の豊田隊長の山行に是非参加されたい。

(五島 健一)

猿投の森づくり20年

猿投の森づくりの会 代表 和田 豊司

山の木を切り始めて53年、森づくりを始めて20年の私的な話である。公式的な報告は「猿投の森づくりの会 20周年記念誌」や「日本山岳会会報“山” 954号」を見ていただければ良い。

私は15歳の春、高校山岳部に入部してしまった。放課後名古屋城の外堀城壁で岩登りの訓練、毎月のように鈴鹿へ通うようになった。土曜の放課後、テント・食料・麻ザイルを担いで藤内小屋の上、ウサギの耳テント場で野営していた。このテント場は東海豪雨(2000年)以前、河原のあちこちに10張ほどのテントが張れる開けた場所であった。食事づくりは生木を伐採して火を起こしていた。新聞紙やわずかなスギの枯れ枝で種火を作る。鉋や鋸でテント場周辺の生木のシロモジやリョウブを切り薪にして炊事するのである。上級生には生木を焚けなくてどうすると言われ煙と戦っていた。なかなか火のつかない竈から見えるウサギの耳の岩場では先輩が華麗な懸垂下降をしていた。

大学山岳部に入ると積雪期以外どこへ行くのも雨でも食事づくりは薪であった。夏の合宿は劔岳の東面で劔沢下流の二股にベースキャンプを張り源次郎尾根、八ツ峰、チンネを登る。この合宿でも炊事はすべて薪であった。流木や枯れ木では不足するので手ごろな生木を伐倒して燃やしていた。大窓で夏山合宿をした時、燃やす薪はハイマツしかなかった。当時営林署の職員の巡視もあったが大窓までは上がってこなかった。縦走では枯れ木を拾いながら歩き夕食用に準備した。当時から営林署は枯れ木といえど焚火禁止の指導をしていた。署員と遭遇した時には彼らより早く遠くまで歩けば捕まらない(指導されない)との先輩のお達しであった。今から考えるとずいぶんひどい半世紀前の木を切る話である。

ヒマラヤのキャラバンやBCではシェルパが



明治時代の瀬戸の山



緑が回復した猿投山

食事の準備をしてくれる。ほとんど木の育たない寒冷地且つ高所でも薪を使う。森林限界付近から枯れ木を運び上げるのである。本来腐食分解して森の栄養となり循環すべき枯れ木を燃やしてしまう。植生を乱し自然の循環を阻害しているのである。50余年実に罪深いことをしてきた。

この20年は別の視点から木を切っている。燃料革命(薪炭から石炭石油へ)により森の木の需要が激減、拡大造林政策(禿山からの回復と建築材料増産のため税金を投入し植林)により緑が回復し日本全体のカーボン蓄積量

(森林資源)が急増して現在も続いている。拡大造林政策の負の面も顕著になりつつあり間伐遅れでした灌木も育たない暗い杉や檜の人工林が目につくようになってきた。反面、人が入らなくなった里山や奥山は自然が回復している。人里近い猿投山周辺でも禿山はなくなり、広葉樹から照葉樹へと植生が変化してきている。

この猿投の森づくり20年の活動はでは名古屋近郊に(1)生物多様性のある(2)人が自然に触れ楽しめる(3)環境林としての機能のある森づくりを目指してきた。他の森づくり団体にはない特徴として20年間間伐はするが生産材としてのスギやヒノキの植林はしな

い。拡大造林の時代は終わった。植えてしまった人工林は間伐する。森の機能の大切さを伝えるために自ら学習し、教育活動を大切にするなどの方針を貫いてきている。

自然観察道沿いは冬には陽が差し込む落葉広葉樹を残す。手の入らなくなったスギ・ヒノキの人工林は灌木が育つ程度に間伐する。これらの活動は木を切ることによって成り立つ。鋸・鉋・チェーンソーを駆使して木を切るのである。50余年登山で木を利用させていただいた恩返し(贖罪)を含め、森に入り木を切り、活用し、森で楽しみ環境林整備をさせていただいている。

山岳名著の旅

～奥秩父を訪ねて～

支部員 西山 秀夫

2024年7月5日の夜から7月7日にかけて埼玉県側の奥秩父を経めぐるロングドライブをした。目的は多岐に亘る。新たな中古車を探し、埼玉県くんだりまで実車の確認と契約が主目的だった。

しかし、地図を眺めているうちに両神山の登山もやれろと知った。これが第二の目的になった。第三には埼玉県の西端の皆野町は上海にあった日本のビジネススクールである東亜同文書院大学(1901～1945。愛知大学(1946～)の前身)の校医を大正9年から5年間勤めていた医師の金子元春(俳人・金子伊昔紅)と息子の俳人・金子兜太の故郷だったから句碑や記念館を見学したかった。

瀬戸市から中馬街道を経て木曽路へ

7/5(金)は名古屋市の暑熱を避けて夜10時に出発。瀬戸市を経由して昔は中馬街道或いは塩の道と呼ばれたR363を走って恵那市へ。R19の木曽福島の道の駅で仮眠。気温は21℃と快適。7/6(土)の朝。R19を走って塩尻を迂回するようにして塩尻峠を越える。一旦は岡谷市に下ると次は和田峠に登るR142を走る。この道は昔の中山道であり、東山道でもあった。笠取峠を越えると佐久市に入る。ここまでは既知の土地である。今度はR254(富岡街道)を東進する。埼玉県と長野県堺の内山峠を越える。幕末には、水戸の天狗党が尊皇攘夷を訴えてこの道を進

軍した山岳古道だった。

大島亮吉『山 随想』の故地

この街道は富岡街道という。途中で神津牧場(こうづぼくじょう)への案内を見た。大島亮吉の『山 随想』の中の荒船と神津牧場付近という随想に登場する。この牧場は1887(明治20)年開設の日本最初の洋式牧場という。

大島亮吉著『山 随想 (荒船と神津牧場附近 1918年)』より

前略。それから、もうひとつそれに是非ともつけ加えて置かねばならないのは、この牧場のめる、新鮮な牛乳の味である。

この山の牧場の乳搾り場はちょうど、牧場のいろいろの建物のちらばっているまんなか牛舎と並んである。そこへ朝むつくりと起きて、すぐさま高い山上の冷たく、さわやかな朝の空気を呼吸しながら、まあたらしい、搾りたての牛乳を飲ませて貰いにゆくのは、またおそろしく自分にとって悦ばしい、そうして健康なことなんだ。三月にはいったばかり、まだこの山の牧場のあちこちには消えきらぬ残りの雪の斑らな時分には、この牧場の朝はすばらしい寒さだ。空気は氷のように冷えて、肺臓に泌みわたるようだし、吐く息は虹(にじ)になるくらい。凍りついた路が、重い鉋靴の下できちきちいう。

枯れた草や畑や小屋の石屋根(いしやね)の

うえには、霜がしろくきらきらと輝いている。荒船続きや、物見の頂きのあたりの雪が光り、金の羊毛のような朝雲のたなびくなかに、とおい黒藍色の山影がうかび、そして牧場から信濃へこえる志賀越えの路傍（みちばた）の、りっぱな落葉松のすらりと立った並木の枯枝は、まっかな朝日を浴びている。

牛酪製造場の煙突からはずっと柔かに煙りが流れて消えてゆく。石を敷きつめた低い屋根の牛舎の間の幅広い通路にはいると、もう家畜特有の匂いがする。乾草の香がせまる。

どこかの牧舎のなかで声高に話し合っている、健康そうで、快活な牧夫たちの話し声、遠くで吠えるあの羊飼いや犬のなき声などとうちまじって、そば近くの牛舎の白いラック塗りの、窓からは、人なつこい、甘えたような、乳牛たちのもうが聴える。牛舎の間の中庭も、そこいらに散らかった寝藁（ねわら）くずも、水たまりもみな凍っている。みかけは燻んだ百姓家づくりで、屋根に石をのせた牧舎も、その内部はみな、さっぱりとして、明るい感じのする西洋風の白ラック塗りになっている。そしてほのぐらい、むんむんと鼻をつくような牛舎特有のこんがらかった匂いのする内部には、栗いろ、白、黒、ぶちなど、すべて小山のようなゼルシイ種の多産なおとなしい獣たちが、でっぴった臀の先にぼんやりあたる薔薇いろの朝日をうけて、立ったり、前足を折ったり、座ったり、反芻したり、涎をながしたり、生温かい呼吸をもうもうと吐いている。

搾乳係りの牧夫が手馴れた手つきで、淡薔薇いろの大きな乳房からアルミニウムの大きなバケツのなかへ、チュウチュウと白い線をほとぼしらせて乳をしぼっている。彼女たちはその間温順な眼つきをしてもぐもぐとただ乾草（ほしぐさ）をたべている。甘ったるい臭気の中を、こんな寒さにも蠅がぶんぶん飛びまわっている。

ニュームのバケツから、この搾りたてのままを厚手のガラスの大コップへ一杯になみなみと注いでくれた牛乳の、なんという新鮮さ、なんという芳醇さ、冷えた身体に生あたたかい牛乳のほんとうのうす甘い味をもって、のどをぐいぐいとおる時のうまさ。

ああ、美しい、きよらかなこの信濃境いの山上牧場の春浅い朝に飲む、この芳醇甘美な

一ぱいの牛乳！ 私は都会にいては米のとき汁みたいな牛乳はのまない。けれどこの牧場へやってくると、いつも毎朝、毎夕搾り立ての牛乳を、二合ばかりはいる大コップに一杯ぐつとのむ。それも朝は、はれやかな散歩や、一日のさまよい歩きに出かける前、夕は終日の山歩きから、ほどよく疲れて帰ってきて、すぐ渴いたのどに夕食まえをのむ。

また晩夏のある暑い日の夕暮れだった。堆肥かつぎを手伝ってかなり疲れ、のども渴いた時に、私はまたその牛乳のうまさを知った。こんなことを私はその時に思い出した。それはテオフィーユ・ゴオチェが、彼のRecits et Croquisという山歩きのスケッチのなかで書いたことだ。彼が暑い夏の日、ピレネエの山中を終日さまよい歩きまわって来た夕暮れに、とある谷間に降りてきてその小さな牧場小屋の傍らの氷のように冷たい流れのなかに冷やしてあった乳の一杯を貰ってのんだ時、それが彼の生涯での忘れがたい美味のひとつだということなのである。

私のこの山の牧場をこのんでくるいろいろな理由のひとつは実にこのまあたらしい牛乳の味を忘れかねてである。ただそこへ乳をのみにゆくことだけでも、それはじつに私にとって悦ばしい健康なことだ。

詩人の尾崎喜八の詩との比較

高層雲の下から「野の搾乳場」

野の搾乳場？ それは遙かむこうにある、ぼんやりまどろむ冬の朝の空の下、淡紫にけむった樺けやきの森のかたまりの下に。

野の搾乳場？

そこへ乳を飲みゆくのは悦ばしく、健康なことだ。

すばらしい寒さよ！ 吐く息が虹になる。凍いてついた路が下駄の下できちきちいう。

畠は霜にさんらんと輝き、野菜は緑玉、野葡萄は血紅石。そして並木のりっぱな枯枝では、朝日を浴びて、焦茶の胸のじょうびたきが燧石を叩くように鳴いている。

私はうれしさでいっぱいになりながら、まだこの上にも日光や空気をとろうとする。

私は自分だけがこんな風景を持つことに誇りを感じ、

多勢の人に立ちまじって都会にいた昨日よりも、

今朝は、自分が少しよけいに純粹に、
また少しよけいに高貴になったかと思う。

路は野の中をつづく。

やがてそれは曲る。

小川の音が玉のようにひびき、

櫓はじがまっかに散っている。

するとそこは搾乳場。

緑のきわだつ櫓の木この間に煙突の柔かな煙が見える

牛舎の低い屋根が見え、家畜特有の匂いがする。

犬の吠え声、牧場の女の話し声、それにまじって人なつこい、甘えた、彼らのモウがもう聴こえる。

すばらしい寒さよ！

乳屋の中庭は散らかった藁も水たまりも凍っている。

ほのぐらい、むんむんする牛舎には、

栗いろ、白、黒、ぶち、すべて小山のような、多産の姫たちがでっばった臀の先にぼんやり当る朝日をうけて、立ったり、前足を折ったり、すわったり、反芻し、涎をながし、生温かい息を濛々と吐いている。

薔薇いろの大きな乳房、豊饒の角。

甘ったるい臭気の中を蠅がぶんぶん飛びまわる。

中庭の台の上、厚手ガラスの大コップへ

なみなみとついで出される牛乳の

なんという新鮮、なんという芳醇。

淡青い空間は光に微動し、

物皆ちらちらと光りかがやき、

とおく冬枯れの森のかなた

はるかに雪の山脈の見える眺望。

ああ、美しい、清らかな武蔵野の冬の朝の芳醇甘美な一ぱいの牛乳！

そんな時の代金には、

あの汚らしい、くしゃくしゃの紙幣を出さないで

なるたけよく光った小さな銀貨を私は置く。
野の搾乳場？

それは遙かむこうにある、

波うつ島とおっとりした空気のかなた、

羅馬ローマの軍道よりも立派な並木路のずつとむこうに。

君も来たまえ、朝のはれやかな散歩の途中、
そこへ乳を飲みにゆくのは

じつに悦ばしい健康なことだ。

閑話休題。かつて読み比べて大島亮吉の剽窃と知ったことを思い出しながらドライブを続けた。ここへは一日を割いて来てみたい。そして芳醇な味の牛乳を飲んでみたい。

群馬県下仁田まで下りつつ、曇りで良く見えないが凸兀とした山なみが見える。荒船山の艦岩らしい形が見えた。

カーブが連続する典型的な山岳道路を下った。そして群馬県下仁田へ着いた。こんにやくと下仁田ネギが有名だ。ここからは上信電鉄と交わりながら下る。富岡市、藤岡市、R254からR140へと変わった。本来ならR254は川越、富士見市へと下ってゆくので目的地へは近い。夜発のお陰で余裕があるので皆野町へ迂回したわけだ。

皆野町の金子兜太のふるさとへ

金子元春は最初は高浜虚子に師事、その後は独協中学時代の同級生だった水原秋櫻子に師事した。共に医師である。

金子兜太は加藤楸邨の弟子で日本銀行で組合活動に熱心だったという左翼系の俳人。中日新聞は毎年8月15日が来ると「平和の俳句」を募り選者としての紙面を飾った。代表句の

”水脈の果て炎天の墓碑置きて去る”

は南方のトラック島に送られて戦死した兵士の遺体を埋葬して、供養もできないままに引き揚げる際の句である。これが原体験だろう。言葉少なに反戦を訴える。

その後は五七五ではない前衛俳句を詠む。それでも晩年は東京から熊谷市に転居して望郷の念が募ることとなり、両神山を遠望する内に

”初富士と浅間の間青し両神山”

と両神山を秩父の産土（うぶすな）と意識した句を多数詠むようになった。少し丸くなったか、と思った。文化勲章を授与する話も有った。只「アベ政治を許さない」と安倍政権を批判したことで立消えになったという。兵隊経験者として集団的自衛権の成立に危惧したのだ。左翼の俳人は戦後、職を得ると転向するがこの人は生涯左翼で押し通した反骨の俳人である。

俳句には土着の人のもつエネルギーがみなぎっている。

元春の次男で金子兜太の弟の千侍（せんじ）の長男の桃刀（もとう）が経営する金子医院内の記念館（生家）、味噌屋、保育園、棕神社の句碑巡りをした。記念館では担当者と親しくお話を聞かせてもらった。この記念館は5年前に開館した。金子親子のふるさとに行く目的は果たせた。

朝鮮から来た神様に参拝

本来の目的である富士見市の中古車販売店Qでネットで探したクルマの売買契約を果たした。Qを辞して高麗神社へ行って参拝した。朝鮮から来た渡来人の神様を祀る。商売繁盛のお札も購入した。心機一転である。神頼みである。

関東甲信越には高麗に因む地名を散見する。武蔵野の国名も諸説あるが芋（からむし）の芋種子（朝鮮語でもしし）に由来するという。全国に20ヶ所ある駒ヶ岳も実は高麗ヶ岳という。南アルプス市も昔は北巨摩郡と言った。巨摩＝高麗である。

そして今夜の最終目的地の道の駅 両神温泉薬師の湯に向かった。途中でスコールのような大雨が降った。すぐ先では雨は降っていないから局地的なゲリラ豪雨だろう。道の駅ではお湯に浸かってゆったりできた。ところが暑い上に蚊がいるので大滝温泉に移動。この時点で両神山登山は暑いのと遠路の帰名があるので中止。

7/7は三峰神社に参拝。神杉の林立する荘厳な境内が素晴らしい。ヤマトタケルの巨大な立像があって驚く。甲府へ出て、諏訪大社上社にも参拝。伊那谷を南下して帰名した。

秩父は静観派登山者の揺籃の地

振り返って思うのは奥秩父は日本山岳会草創期の登山家の揺籃の山であった。東海地方の登山者は鈴鹿で揺籃期を過ごし鍛えられて各地へ散ってゆくごとく、だ。

冒頭に引用した神津牧場は深田久弥も行った。『わが山山』（中公文庫）に神津牧場の項がある。この時代は大島亮吉の名文であまねく知られて200人もの登山者が訪れたと書いている。オーバーユースになり別の宿舎へ分散させられたらしい。

職業作家よりももっと古くから知られた小暮理太郎『山の憶い出（上下）』には秩父の文章が多い。群馬県出身ということもあるし東京

都庁の職員としていつも山を眺めていたという。

次は田部重治だ。「田部重治は、『日本アルプスと秩父巡礼』（のち『山と溪谷』）で、日本ならではの美しい溪谷と深林の山旅とともに、登山に伴う自らの内面変化を描き、登山界に大きな影響を与えた。」という。古びた『峠と高原』（新潮文庫）を開くと秩父についてのエッセイが多い。今回調べて見て気が付いたのは原全教『奥秩父』（朋文堂）が未だ文庫化されていないことだった。ネットからのコピペですが「石川県金沢市川除町生まれ。中略。

木暮理太郎、田部重治に続いて1925年頃から奥秩父に分け入り、その景観、古風俗、史実、人情美への礼賛は凡庸ならざるものがあり、尾崎喜八をして秩父の王子と言わしめた。その著作『奥秩父 正・続』は奥秩父全書として申し分のないものであり、空前絶後の山書と言われている。」

日本地質学発祥の地

秩父山地は両神山、妙義山、二子山、荒船山など転落、滑落による死亡事故がものすごく多い。そのはずで秩父古生層の一带なのである。これ以上浸食されない硬い岩盤の山なのでビブラムのゴム底が古く硬くなってグリップ力が劣化すると滑落もあり得るだろう。三点支持の基本技術に加えてゴム底の硬度のチェックも必須である。

日本地質学発祥の地でもある。中央構造線の南側の地質を三波川変成帯といい、領家変成岩をいう。天竜にある奥領家が由来である。三波川は秩父を流れる川であり、地質学の用語は秩父発である。

こうして山岳古道、歴史の峠、関東の登山家に愛された神津牧場、皆野町の金子父子のふるさと訪問などを経めぐる850 kmのロングドライブを終えた。



「リスク軽減につながる登山計画の 立て方、読み込み方」講習会開催

技術向上委員会委員長 清水 克宏

技術向上委員会では、11月24日(日)に、登山学校とタイアップして、「リスク軽減につながる登山計画の立て方、読み込み方」講習会を開催しました。

当初、技術向上委員で、2009年カンリガルポ山群登山隊隊長、2015年念青唐古拉西山群登山隊総隊長などを務められた井上達男さんが豊富な経験をもとに講師を務められる予定でした。しかし、あいにく体調不良のため、私が井上さんの資料を参考に、ピンチヒッターで講師を務めました。

安全登山において、いかに「登山計画」が重要かと、その具体的な作成・読み込み方のポイントを、以下にご紹介します。

○なぜ登山計画が安全登山に最重要なのか？

警察庁統計によると、令和5年の山岳遭難は過去最多でした。遭難者数の推移をみると、特徴的なのは、死者・行方不明者は横ばいなのに、遭難者・負傷者が急増していることがあります。これは、ネット情報などに頼った「安易な遭難」、自己責任を全うしない「安易な救助要請」、自分の「現在の体力・技能」を自覚しない中高年者の遭難の多発(40歳以上で約80%)といった要素が重なっていると考えられます。

○なぜ登山計画が安全登山のために最重要なのか？

・令和5年の山岳遭難は過去最多(警察庁統計)



これに対し、警察庁の「令和5年における山岳遭難の概況等」にあげられた、「山岳遭難防止対策」では、以下の5点に留意する必要があります。

①的確な登山計画と万全な装備品等の準備

②登山計画書・登山届の提出

③道迷い防止：地図・コンパス・GPSなどの携帯・活用

④滑落・転落防止：危険個所の事前把握と装備の準備・利用法の事前学習

⑤的確な状況判断：気象情報、エスケープルートの事前把握に基づく

下線でマークしたように、遭難防止対策の留意点のほとんどが、「登山計画」に関わっていることが分かります。登山技能というと、登攀や読図などに目がいきがちですが、安全登山には、的確な登山計画の作成技能や、計画を踏まえたリスクマネジメントの技能を身につけることが不可欠です。

○登山計画作成・読み込み方のポイント

I 客観的危険と主観的危険

急斜面、雪崩、落石といった物理的に危険な条件や環境による客観的な危険だけでなく、登山者の技量、基礎体力、体調など登山者自身に帰属する主観的危険も留意し、計画する

II計画-実践-報告サイクルでステップアップ

P:しっかりした登山計画を立て D:登山し C:下山後は写真を整理したり登山記録・報告を書いたりしてもう一度登山を楽しみ A:実践した登山のレビューを次の登山に生かしてゆく

IIIリスク軽減につながる登山計画の策定方法

①登山計画 ②装備計画 ③食料計画

→具体的作成方法のポイントを紹介

④計画のreview

→現地での行動をあらかじめ机上でSimulationし、登山における潜在的な危険性などに関しリスクアセスメントを実施し、対応策を検討しておくことが重要

IV 記録の整理と反省

登山学校生18名、同関係者9名、支部員7名、支部友7名の計41名のみなさんが、多数熱心に受講いただきました。今後の安全登山に活かしていただければ幸いです。

写真展実行委員会 写真教室の開催

写真展実行委員会委員長 岩月 邦文

写真展実行委員会では、11月7日18時より2時間、支部ルームにて写真教室を開催した。

写真勉強会については、委員会の中でスライドを使って実施してきたが、今回初めて講師を迎えての勉強会を開催した。参加者は12名。講師は山岳風景写真家の大島隆義氏で今夏山フェスタでも講演された方で終始和やかな雰囲気、丁寧で分かりやすい説明に参加者一同納得感に満ちた感があった。

参加者が持参した写真（プリント又はデータ、スマホ）から、まずは撮影場所と撮影意図に続いて撮影者の推しを聞き出してから、大島氏からのアドバイスと推しを指導していただくというスタイルで進められた。参加者からは皆さん一様にどの写真がいいのかを教えてほしいとの思いが強く、意見交換するなか大島氏からは最後に決めるのは本人次第ですとピリ辛の講評もあった。ある参加者が写真に込めた思いからの推しを述べると、大島氏からはその写真を見た人にはその思いは伝わらないよと言われたことが印象的であった。



写真教室での講評（蟹井撮影） 支部ルーム

一通り講評が終わって残りの時間に、大島氏から写真撮影で基本となる構図の捉え方やスマホでの写真撮影技術、交換レンズカメラとスマホとの長短所についてなど丁寧に説明していただき、普段あまり考えずに撮っていたことが分かり大変勉強になった。

勉強会が終わった後も大島氏にスマホを見てもらい意見をもらっていた人もみえた。また今度はスマホ写真に限定した写真教室を開催したいねという参加者からの声も聞かれた。

身柄付補導委託登山に関わって

ボランティア委員会 杉山 雄彦

私は、永年、名古屋家庭裁判所の家事調停委員をしながら、名古屋少年友の会*の一員として、少年達の付添人活動に携わっていた。この活動は、試験観察といって、家裁が観察中の少年達の最終的な保護処分を決定するために生活態度を観察して様子を見る制度である。活動の内容は、名古屋城の清掃活動や切手整理活動等である。

私は、調停委員を退任した後、この活動の中にキャンプや登山をプログラムの一環に加え

られないかと思い、支部員の教員OGの方々と連れ立って家裁の少年調査官室に相談を持ちかけてみた。

家裁側からは好感触を受けたと同時に、このような活動の永続性を望むとどうしても個人では限界を生じることから、きちんとした組織の受け皿の必要性を感じた。そこでこの際、公益社団法人格を有する日本山岳会東海支部がその役割を担うのが最適ではないかと思いボランティア委員会に是非を提案した。

家裁宛に具体的な企画書を提出し、首席調査官とボラ委の前田委員長、尾上委員らと現地調査（朝明茶屋）に赴き、検討の結果、年2回春と秋に身柄付補導委託登山として実施することが決まったのである。

第1回は、2018年6月14日（木）～15日（金）の一泊で実施した。少年2名と調査官1名と共に名古屋家裁を出発、朝明茶屋で薪割りそして参加者全員でBBQ、夜は、海外登山のDVD鑑賞や登山の体験談などで懇親の時間を持った。

翌日は、根の平峠～水晶岳～羽鳥峰の周回コースを歩き、午後、家裁に戻り“振り返り”（反省会）をして解散というスケジュールで順調に終えることができた。東海支部からは、指導員として前田委員長を筆頭に9名が参加したのである。

ところが、この委託登山コロナ禍で一時中断を余儀なくされた。3年後、コロナ明けで再開することになったが、県をまたいでの移動は駄目だということで、猿投山日帰り登山という新しい試みで再開されることになった。

いかにもお役所らしい措置である。ついでに申し上げると、この種の活動の写真撮影は一切禁止で、残念ながら写真の類はない。

家裁の調査官も毎回熱心に、参加する少年を調整したり、当日の山行にも意欲的に参加してもらっている。また、学生ボランティアの諸君も参加してくれていて、学ボラの存在は、同世代の少年の気持ちを和ませる要因にもなっているのである。

参加した少年のその後については触れることはできないが、家裁及び少年や保護者からの感想を通して、高い評価を得ていることから、改めて少年の再非行防止に向けた公益法人としての役割を充分果たしていることを実感で

きているのである。

最近では、少年の非行が減少傾向にあるようだが、それでも一定数の子供が非行に走る現実には変わりはない。その背景には、子供自身が持つ特性や家庭環境、親の抱える問題などが主な原因だ。

また、悪い友達や大人など周囲の悪影響も子供を非行に走らせてしまう原因と捉えられがちだが、実は、もっと親と子の関係が良好であるかどうかが非行と深い関係があるのである。

親との関係が上手くいっていないというのは、子供にとっては大きなストレスなのだ。子供は、自身の感情を上手く伝えることができないため、自分のストレスに気付いて欲しいとサインを送っている。しかし多くの親は、こういったサインに気付かず、「何でそんな悪いことをするの」とか「そんなことをしたら駄目だ」と一方的に叱ってしまう。むしろこれは逆効果で、返って子供を非行に走らせることに繋がるのである。

そんな行動を子供が見せるようになった時は、何か不満なことがあるのだらうと察し、しっかりと気持ちを聞くようにすることが大切なのだ。非行に走る少年は、一般的な少年よりも家族間の絆が希薄であることが分かっている。子供の非行というのは、家族全体の問題であるといえるのである。

※少年友の会

家庭裁判所や家事調停委員などと連携して、家裁に送られた少年を二度と非行に走らせないように支援するボランティア団体である。少年友の会は、NHKドラマ「虎に翼」の主人公のモデルである三淵嘉子（初の女性判事・家庭裁判所所長）が創設に尽力している。私は、この番組を通して、発足当時の状況を知り我が意を得ているのである。

第19回東海岳人写真展を開催します

テーマ [山とつながる よろこび]

開催期間 2025年（令和7年）2月25日（火）～3月2日（日）

開催時間 午前10時から午後5時

展示会場 名古屋市中区 市民ギャラリー栄 7階 第1・2展示室

東海支部コーナーを設置して広報啓発活動も行いますので、皆さまお誘いの上ご来場ください。

東南アジア・インド紀行の話 Ⅲ ～山岳写真家長谷川傳次郎と伊藤祐民～

支部員 田中 進

長谷川傳次郎は明治27(1894)年、東京日本橋小伝馬町の老舗長谷川箆笥店で生まれた。

同店は高級家具製造で知られ、20歳で家業を継いだが、体調を崩し運動の為YMCAに通い、登山家榎有恒とも知り合った。

写真は母方のカメラマニアから勉強し、家業を辞め美術デザイン研究の為、大正14(1925)年インドに渡る。アジアで初めてノーベル文学賞を受賞したラビンドラナート・タゴールのビシュババラティ大学美術学部に入り、工芸美術を学んだ。在学中の昭和2(1927)年から翌年にかけて、学友の印度人マサジーと中部ヒマラヤ横断、チベットに入りカイルス一周の写真撮影の旅をする。



長谷川傳次郎とマサジー ヒマラヤの旅より
チベットに入った日本人では明治33(1900)年の河口慧海に次ぎ二番目だった。

カイルス(6,656m)の全容を写した写真は世界的に見ても貴重。

昭和5(1930)年に帰国、「ヒマラヤの旅」を出版したのは昭和7(1932)年。



チベット仏教、ヒンズー教、ジャイナ教の
聖地 カイルス 撮影長谷川傳次郎

本の序に「君は恰も旅僧の如くに、何時も飄然簡素なる姿を以て、艱難なるべき山旅を続けて行った。或時は土民に親しみ、山に歌い、随処に楽しみを享けている。斯くして此書に収むところは、凡て君が如何にヒマラヤを愛し、之を解し、且つ知るかの好記録にして、花に蔽はるる溪谷の、或いは荒涼たる氷河の、或いは又他チベットの高原、其の各々の深き興趣を傳へて、珠玉の如き純粹なる光彩に私達の心を震はしむる。思うに我国人にしてヒマラヤを探りしものは甚だ稀である。此時此書の出づるは、会心の事たるのみならず、我が国登山界に貴重なる資料を供するものであらう。

1932年8月 榎有恒

日本山岳会第4・7代榎有恒会長が彼の偉業を評価した。

我国海外登山の先駆者たちには大きな影響を与えた。ヒマラヤ山脈のナンダ・コート峰(6,867m)に日本最初の遠征隊立教大学山岳部が昭和11(1936)年に見事初登頂を為した。

長谷川は昭和6(1931)年北千島探検、その後、スキー映画(白馬岳、立山)作製、日光国立公園、満州を撮影、そして昭和28(1953)年に法隆寺の彫刻写真展を米国各地で開催する等、幅広く写真撮影し多くの紀行写真集を出版した。

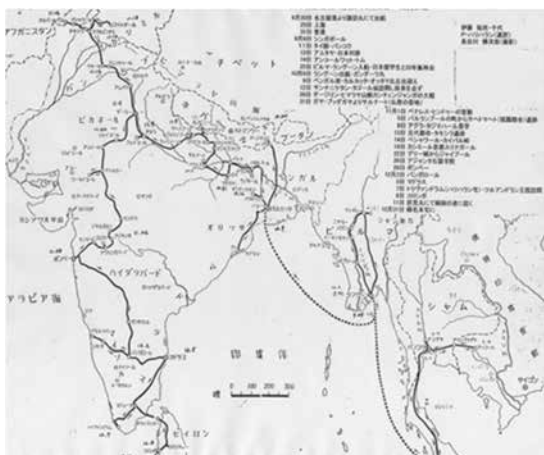
中でも昭和9(1934)年松坂屋創業者の伊藤次郎左衛門祐民からインドの経験と写真の技術の評価され、東南アジア仏跡巡拝摄影旅行の誘いが有った。

好きなインドに行き、最新ライカのカメラで写真を思う存分撮れるというので、彼は喜んで引き受けた。



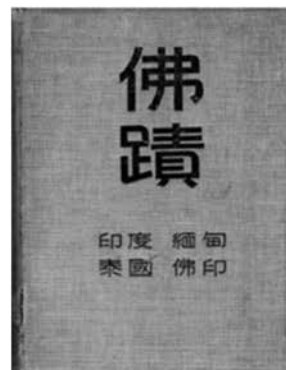
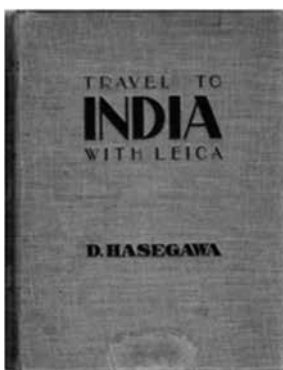
左から写真撮影・長谷川傳次郎、
通訳・ハリハラン、千代、伊藤祐民 一行四名
1934年諏訪丸船上

出発は8月21日から帰国12月30日の4ヶ月間、訪問先は香港、シンガポール、マレーシア、タイ、カンボジア、ミャンマー、インド、スリランカの8か国におよび各地の仏跡、人々の住居、建物、風景を数多く撮影し記録した。



全行程1万8千km 4ヶ月船と自動車、汽車の旅

帰国後の昭和14(1939)年写真集「INDIA」を出版し、更に伊藤祐民が昭和15(1940)年に亡くなった翌年に、故伊藤次郎左衛門氏仏跡巡拝記録「佛蹟—印度、緬甸、泰国、佛印」の写真集を出版した。



印度エローラ遺跡 左から千代、祐民、傳次郎
1938年11月ハリハラン撮影

通訳のハリハランはタゴールの大学卒業後、美術の先生をしていたがタゴール翁の勧めで日本へ、富本憲吉（陶芸家文化勲章受章）の下で2年間の修業を終えた。作品展を銀座松坂屋で開催したのち瀬戸に移住し、伊藤社長のお声がかりで松坂屋美術部嘱託員となり仏跡旅行の一員となった。

祐民はタゴールの大学を出た二人を連れて、サンティニケタンのタゴール翁に日本から持参の抹茶を千代のお手前で点じ大いに喜ばれた。10歳年下のハリハランとは昭和28年東京で再会し、傳次郎の鎌倉の自宅でくつろぐ二人の写真が残り生涯良き友人だった。



1953年鎌倉自宅の傳次郎61才、ハリハラン50才

ハリハランは昭和45(1970)年60歳、インドバンガロールの自宅で妻里子(瀬戸品野町出身)が葬儀を行い、長谷川は昭和51(1976)年鎌倉で81年の生涯を終えた。

私は伊藤祐民別荘の揚輝荘に係わり、伊藤家に保存されている長谷川傳次郎の写真アルバムと16mmフィルムを調査した。

3時間半に及ぶ巡拝旅行の映像は昭和初期に民間人が残した貴重な記録。傳次郎の死後このフィルムと写真が福岡市美術館に遺族(前田千鶴さん)により、寄贈されていることが解った。

美術館では2010年7月21日から「長谷川傳次郎写真展」が開催され、東南アジア仏跡旅行と京都の仏像写真25点が展示された。学芸員より寄贈の16mmフィルムが劣化し見ることは出来ないと言われたので、伊藤家が保有のフィルムを劣化する前にCDで保存していたのをコピーして差し上げた。



劣化した16mmフィルムとCD 1~9巻

平成7(2019)年に長谷川傳次郎の調査の為東京多磨霊園を訪れた。立派な墓地には昭和6年施主長谷川傳次郎の墓石と、昭和62年前田千鶴建立の燈籠、墓誌には傳次郎、妻ちよ、堅三、妻睦子、そして平成25(2013)年施主長谷川欽一の卒塔婆が有った。

霊園事務所で苦勞して伊豆の国市長岡町在住の欽一氏と連絡が取れ、傳次郎氏のことを教えて頂いた。長谷川家の長男は傳次郎、二男光二、三男堅三、大正12(1923)年の関東大震災で罹災後、釧路の鶴居村で牧場経営を三兄弟で始めた。

傳次郎は美術研究の為印度へ、堅三はすぐに東京に戻り、次男が長く戦後も牧場経営を続けた。堅三の長男欽一氏の両親は昭和62年に府中市多磨霊園に立派な長谷川家のお墓を建立した。



墓入口の燈籠は千鶴さん(傳次郎、ちよ夫妻に子供が無く養女結婚し前田姓)が寄進。何故傳次郎死後遺品が遠く離れた福岡市美術館に寄贈された理由は、欽一氏の母方の岡田喜一氏が長崎大学教授で傳次郎と千島に調査撮影旅行した。その縁で娘の千鶴さんの同意を得て寄贈した。



長谷川筆筈店従業員の供養塔
昭和6年 施主 長谷川傳次郎
右墓誌 傳次郎夫妻 堅三夫妻

現在滋賀県東近江市の「西堀榮三郎記念探検の殿堂」は、榮三郎の祖父の故郷である横溝町に平成6(1994)年に開館し本年で30年になる。

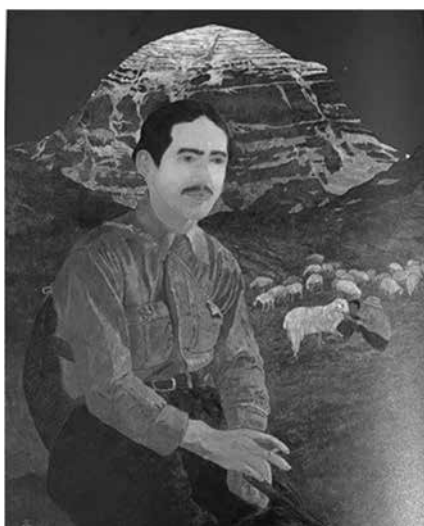
私は2024年10月に殿堂を訪れた。



池の畔に立つ西堀榮三郎記念探検の殿堂

1階展示室には初の第1次南極観測越冬隊長としての南極観測及び榮三郎の生涯が紹介されている。2階は近代(安土桃山時代以降)の日本人探検家50名が肖像絵画で紹介展示されている。長谷川傳次郎の肖像画は中村豪志画伯の作品。

聖山カイルスを背景に、中景に羊とたわむれる情景を描き、氏の理想と情熱とロマンを秘めた肖像が描かれている。



聖山カイルスを背景に長谷川傳次郎

50名中に日本山岳会会長は4名紹介されている。西堀榮三郎氏は第13代会長。

日本山岳会初のヒマラヤ8000m峰のマナスル(8163m)遠征は今西錦司氏(第12代会長)が

昭和28(1953)年に第1次登山隊長として惜しくもあと375mで登頂断念となった。更に翌年の第2次隊は、村人の聖山の祟り反対騒動で入山断念した。第3次の昭和31(1956)年に62才の高齢でありながら登山隊長を榎有恒(第4・7代会長)が引き受けて、見事に隊員の今西壽雄が初登頂した。彼も殿堂の一人として紹介されている。後に第15代会長に就任した。



アイガー東山稜初登頂の榎有恒

昭和4(1929)年榎有恒は27才の時アイガー東山稜の初登攀に成功した。永年ヨーロッパの登山家の挑戦を退けていた。

この難コースの成功により榎の名前は世界的になり、日本の登山界に大きな刺激と影響を与えた。殿堂の50人の内半分は私の知らなかった多くの探検家達で、全アジア、南アメリカ、ヒマラヤ、極地、に探検の情熱を傾けた。



会場中央に展示されている巨大な地球儀に探検場所が表示紹介されてる。

皆さんもぜひ一度は訪れて欲しい。

第 66 回支部友会・朝明ミーティング

支部友委員会 田中 進

第66回支部友ミーティングが朝明茶屋をベースに10月26日(土)・27日(日)に開催された。

朝明ミーティングは10年以上前から支部友会の年中行事です。登山学校に所属する支部友会員14名は6名の指導員と3チームに分かれ、学校に所属しない14名の会員は委員4名と3チームに分かれ鈴鹿の山を分散登山。他の支部友委員10名合計45名が参加した。

26日(土) 分散登山 第1パーティ(4名)ーブナ清水・ハライド(標高908m) CL近藤 政仁
第2・3パーティ(3名)ー釈迦が岳(1,092m)
CL林 康太郎 第4パーティ(6名)ー水晶岳(954m) ①ブナ清水ルートCL 榎 将美、②水晶岳ルートCL 川崎 禎明

夕食(B B Q) 16:45 ～食材と物品は食事班5人によって購入、運ばれて来た。分散登山の皆さんは入浴後16時から6班に別れBBQ会場に集合。各班から野菜カットと食材盛り付けを手伝ってもらい、炭火起こしも順調に開始を待っていた。16:45前田支部副委員長の乾杯の音頭で開始。



キャンプファイヤー19:30～

今年も新人会員の皆さんが鈴鹿の山から下りて来た「火の神」から聖火を受け継ぎ焚木に点火。バイオリン、ギター演奏、司会川崎明子で山の歌を班ごとに合唱してもらう。アトラクションのジャンケンゲームで勝った人は景品プレゼントを受け取りこちらも大いに盛り上がり21時に終了した。

27日(日) 7:00～朝食 A ロッジ食堂

座学8:00～9:30

『ヒマラヤ登山今昔・何故人は山に登るのか』

講師：尾上 昇氏 (東海支部常任評議員)

内容：ヒマラヤ登山の変遷

勃興期～1950年頃・冒険、探検、探求の時代を経てアルピニストがヒマラヤに挑戦。



隆盛期～2000年頃・次々と未踏峰が登られ8000m峰14座が初登頂されたバリエーション時代到来。転換期～現代・大登山隊時代が終焉しアルパインスタイルが主流時代となる。朝食後皆さん熱心に眠ることなく聞き入った1時間半だった。

ファーストエイド講習10:00～11:00

講師：菰野消防署署員 場所：自炊場B

登山中での骨折・怪我・虫刺されの対処方・応急処置等実践を通して体験・見学した。



演習12:00～14:50 講師：小古 真也氏

①「一般登山道で役立つロープワーク」参加者(6名) ②「ツェルトの張り方」参加者(5名)

<登山学校
Aクラス>
セルフレス
キュー講座



解散式15:00 金谷 正起支部友委員会委員長より解散の挨拶。

昔取った杵柄

東海支部の「猿投の森づくりの会」の法人会員デーが、去る 11 月 30 日(土)催された。趣旨は、森づくりの会の法人会員の関係各位に感謝する集いである。

内容は、例年猿投の森の中の雑木の伐採体験や、しいたけの原木の菌打ちである。中には、持ち帰った原木を上手に育てて、見事大振りのしいたけを収穫した人もいたとか。

昼食は、森の中で、森づくりの会員手作りのトン汁に舌鼓を打ちながらおにぎりを頬張る。

今年は、しいたけの菌打ちに替って餅搗きが催された。久し振りに杵を振るう人(昔取った杵柄組)、昔おばあちゃんの家でやっていたとか、子供の頃幼稚園でやったとか。近年ではめずらしい餅搗きに参加者一同興味津々。

搗き立ての餅は、その場で下ろし大根の絡み餅、きなこ餅、おはぎとなつて振る舞われたことは、言う迄もない。(編集委員)



幼児もトライ!!

登山用具あれこれ⑭

アクティブインサレーション

装備委員会委員長 千葉 泰丈

夏の登山においてもザックの中に保温着を持っていかななくてはならないことを改めて体験したのは、北海道の十勝岳に行った時でした。

登るにしたがって、時間が経つにしたがって風が強くなり、雨は降ってはいませんでした。ガスで景色は何も見えなくなり、気温はどんどん低下していきました。その時持っていた保温着はフリースではなくナイロンの軽いシェルと薄い中綿を組み合わせたライトシェルジャケットと名前が付けられたコンパクトにたためる保温着でした。結局登頂をすることなく下山しましたが、このウェアのおかげと、石に塗られた登山道を示す黄色の目印が自分の命を助けてくれた2つの要素だと思いました。

雨具とフリースを組み合わせることも選択肢として有りましたが、フリースはコンパクト性に欠点があります。ザックの中に入れておくにはかさばり過ぎます。雨が降っていません



ファインポリゴンを封入したアクティブインサレーション

でも雨具を着なくてはいけない理由は、雨具は風を通さずに体温を維持できるからです。1枚で保温と防風を兼ねてくれてコンパクトに

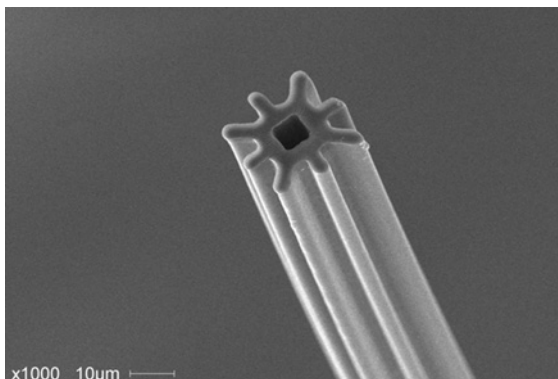
収納できる保温着の存在は素晴らしいと感じました。

冬山に行くときのレイヤードは登山を開始する時からミドルレイヤーを着ていると思いますが、登山の最中に暑いから、寒いからと言って基本的に脱いだり着たりしません。行動中は寒くても暑くてもそのままです。登山中にどのような条件になっても快適な素材の選択とレイヤードが大事なようです。

近年ミドルレイヤーに要求されている性能は保温しながらも今までの素材よりもより通気性を重視するようになりました。と言うのも登山はよりアクティブに動き回れるように快適な性能を求められるようになったからだと考えられます。暑くても寒くても1枚で両方に対応できる素材が採用されるようになりました。それがアクティブインサレーションと名付けられるウェアです。

同じ目的で用いられるものにフリースがありますが、起毛面に格子目にグリッドを入れて普通のフリースより通気性を良くしたのも出て来ています。

さらに、最近注目されている新しい素材は、1本の細い繊維の断面の中に穴が開いていて、なおかつ表面が8本の突起が入っているポリエ



穴の空いた中空糸に8本の突起を放射線状に配列したタコ足断面

ステル繊維です。この新しい素材によって保温性と高い通気性、軽量性のレベルが高まりました。そして8本の突起の効果によるデッドエアが遮熱効果を実現しています。

その他には中綿が1枚の化学繊維のシートでそれをしわくちゃにしたような見かけですが、その素材が厚みを持たせて保温性を維持しつつ通気性を実現しているウェアも有ります。注目して良いでしょう。この商品は見た目の好き嫌いが有ると感じますが、新しい素材のミドルレイヤーに注目する価値が有りそうです。

会員の広場

同好会コーナー

スケッチクラブ

《秋の立山》

村中 征也

9月11日(水)～13日(金)、7名で立山へ。

何度か訪れているが、いずれも20代の時なのでもう50年も前になる。環境は変わったが、雄大な姿は不変である。



みくりが池温泉

標高2,410mにある日本最高所の温泉で、立山の姿を写すみくりが池畔に建つ。高所の温泉は、高天原と白馬鎧の2,100mに浸ったことがあるが更に高所。地獄谷からの引湯で、単純硫

黄泉、54℃の完全掛け流しである。

一軒宿の山小屋だったのが、室堂へのバスやアルペンルートの開通に合せ旅館に改変。日本山岳会員は10%割引が適用され有難かった。浴槽の窓からは緑の山並が見え、登山で疲れた体には心地良かった。

立山登山

2日目、6人が立山を目指し、1人が室堂山を目指した。右膝への人工関節手術で足が衰え、登山は諦めていたが、目の前にすると「山心」が湧いて来てチャレンジ。一の越からは別々の行動ということで出発した。

「絶対に転ばない」細心の注意で登り続ける。途中から雨具を必要とする天候だったが、1時間半弱で雄山神社に到着、10分で3,003mの雄山頂上に立てた。2人が雄山登頂、2人が3山登頂、その後一の越で落合った。

称名滝

日本一の落差350mを誇る4段の滝で、立山連

峰の水を集めて豪快に流れ落ちる。称名川となり常願寺川へと流れ込む。

滝はバスの車窓からも遠望できるが、目の前で味わってみたかった。ケーブルカー下の駅の立山駅からバスで15分、遊歩道を歩いて30分の距離にある。

3日目、3人が弥陀ヶ原でスケッチ、1人が室堂から美女平まで16.4kmを6時間弱で歩き通した。滝へは3人で向かい、目の前に350mを落下する水しぶきを浴び、見上げる迫力は勇壮、思わずGreat!と叫びたくなる。短い時間だが、滝見台からスケッチした。

ミドリガ池からの立山



称名滝



《第10回作品展》

石井 仁

10月2日(水)～6日(日)、名古屋市市政資料館で開催。2015年2月にスタートし、コロナ禍の中断もあったが、10回目を迎えることが出来ました。また資料館は、NHKの朝ドラ「虎に翼」

の撮影に使われて話題になり、多くの来館者がありました。



飾り付けを終えて作品を前に

今回は、会員のアクシデントなどで11人22点の展示になりましたが、来展の皆さんから「個性的な力作揃い」との評価を頂きました。

高橋支部長始め、多数の支部員や知人にお越し頂き、感謝に堪えません。中央にテーブルとイスを設けましたが、絵を肴にした歓談は有意義でした。また初対面の来展者同士を交えての語らいは、クラブライフのパワーを感じさせてくれました。



高橋支部長を迎えて

TOPICS 2

芸 達 者

東海支部には、楽器の演奏を得意とする連中が結構いる。支部友委員会やボランティア委員会の集りで腕をふるっているのが、田中 進さん、磯部 隆さん、山田 弘さんだ。

今年も支部友会の朝明ミーティングでは、BBQの後のキャンプファイアーで田中さんのギター、磯部さんのバイオリンの伴奏で参加者全員が山の歌を合唱。童心に返り大いに盛り上がる。忘年会でも二人の伴奏で合唱。ボランティア委員会の手作り忘年会にも二人が登場。それにプラス山田さんのサックスのソロがクリスマスソングを奏で、一気にムードを醸す。東海支部は、芸達者揃いである。(編集委員)



朝明ミーティングの左 磯部さん、右 田中さん



山田さんのソロ

委員会報告

【写真展実行委員会】

写真山行の報告 1. 弥高山



10月26日(土)曇り 参加者4名

紅葉と見晴らしの良い山で、なおかつ撮影をしながらゆったり登れる山という観点で弥高山を選びましたが、今年の猛暑のあおりで紅葉は期待出来ず、空模様も降らなければ良しとしようという状態で撮影にはもう一つどころか二つ三つと言ったところでした。

上平寺城跡くらいまでは針葉樹の暗めの登山道ですが、珍しいキノコなど見つけては楽しんで歩き、城跡からは明るい広葉樹の道を登ります。紅葉していれば楽しく撮影のすすむ登山路です。

城跡から30分も登れば弥高山の山頂ですが、今回は20日から鹿害から伊吹山の植生を守る為に猟師による駆除が始まっていて、山頂わずか100m程手前から通行禁止となっていて山頂を踏めず、手前の分岐より弥高寺跡へ降ることとなりました。あと100mで入山禁止という措置は悲しいものです。

弥高寺跡は山の上に三段にのびやかな草原が広がり、琵琶湖や長浜、米原方面、正面に霊山の山、関ヶ原の町など見下ろし、のんびり食事の楽しめる場所です。

帰りは山腹をトラバースする道を選びましたが、道幅が狭く片側が切れ落ちているので気を使うコースになります。さほどの危険ではありませんが、回避するなら来た道を引き返せばいいでしょう。

ゆったり歩いても4時間くらいのコースです。これからが紅葉見頃ですし、琵琶湖一周狼煙祭りもあります。京極氏の遺跡とともに訪ねてみてください。(蟹井 れい子)

2. 臥龍山行基寺を歩く



撮影：蜂矢

11月23日(土)晴れ 参加者5名

今回は公募した写真山行で写真展実行委員会の委員以外で2名の方に参加いただきました。心配した天気は上々で雲がやや多い空模様でしたが、晴れ間を味方に撮影が出来たかと思っています。

養老線的美濃長山駅から蜜柑畑や神社などを通り抜け家々の花々を愛でながら行基寺の参道入口まで歩きます。参道手前の池の端に日本武尊が大和に帰る途中で怪我をおして杖を突いて登ったとされる坂の碑がありました。

ここからはずっと坂道が続きます。参道の両側にはモミジの大木が続き期待して登ってきたのですが、残念ながら紅葉には早く日当たりが良い箇所には紅葉が見られた程度でした。それでも何とか紅葉を探しての撮影山行でした。行基寺は744年、地方を巡っていた行基がこの地の洪水による被害を目のあたりにし人々の為に建立したと言われています。

今回の余祿は行基寺の書院からの眺めと手入れされた回廊式庭園です。宝永2年に美濃高須藩松平家初代松平義行公が当山再建と同時に縁山和尚によって作庭された庭園です。眼下には庭園から続く揖斐川水系が広がっています。この庭と遠望が一体となってこそ行基寺の醍醐味であると言われています。外部の常夜灯がある展望台からは大垣や岐阜の町並みや右手には名古屋駅の高層ビル群が眺められます。素晴らしい風景の余韻を抱いて参道を下り同じ道を山崎の駅まで戻りました。

(岩月 邦文)

支部友コーナー

◆支部友委員会山行計画(令和7年4月～6月分) ＜申込み開始＞

支部友会員は山行日の3か月前から、優先は1ヶ月です。支部会員は山行日の2か月前から、山行の募集人員を超えない範囲で参加申し込みを受け付けます。

4月5・6日(土・日) ☆☆

山名：鈴鹿 国見峠・ブナ清水・腰越峠
リーダー：村瀬 恭平

4月6日(日) ☆☆

山名：鈴鹿 竜ヶ岳
リーダー：今津 英一朗

4月12・13日(土・日) ☆☆

山名：中国山地 蒜山三山
リーダー：林 康太郎

4月13日(日) ☆☆

山名：奥三河 三ツ瀬明神山
リーダー：近藤 政仁

4月19日(土) ☆

山名：京都トレール 伏見桃山・蹴上
リーダー：村瀬 恭平

5月5日(土) ☆

山名：渥美半島 雨乞山・大山
リーダー：田中 進

5月10日(土) ☆

山名：京都北山 愛宕山
リーダー：村瀬 恭平

5月17日(土) ☆

山名：伊那山地 戸倉山
リーダー：川崎 禎明

5月18日(日) ☆☆

山名：伊船 仙ガ岳
リーダー：磯部 隆

5月25日(日) ☆☆

山名：滋賀 横山岳
リーダー：近藤 政仁

6月7・8日(土・日) ☆☆

山名：北八ヶ岳 にゅう・北横岳
リーダー：村瀬 恭平

6月7日(土) ☆☆

山名：中央アルプス 烏帽子岳
リーダー：川崎 禎明

6月14日(土) ☆

山名：岐阜北部 金華山探索
リーダー：磯部 隆

(夏山) 6月28・29日(土・日) ☆☆

山名：中央アルプス 恵那山
リーダー：田中 進

次回支部友ミーティング

開催内容のお知らせ

[予定] 第69回 4月8日(火)

テーマ：「2025 夏山への誘い」

講師：山行リーダーが夏山コースを説明し参加者は先行申し込み受付です。

支部友会員数 令和6年11月現在 69名

リーダー連絡先

尾上 昇 FAX：052-832-3878

メール：onoe@onoe.co.jp

金谷 正起 携帯：090-9931-3600

メール：kanaya.masaki@rouge.plala.or.jp

榊 将美 携帯：090-7237-4410

メール：m.sakaki@minds-consulting.jp

村瀬 恭平 携帯：090-4186-9876

メール：hoshizakari@docomo.ne.jp

田中 進 携帯：090-9191-8666

メール：t.susumu@peace.ocn.ne.jp

今津 英一朗 携帯：090-2616-7549

メール：imazu.eitirou@maroon.plala.or.jp

磯部 隆 携帯：090-9180-7245

メール：takass@yk.commufa.jp

高松 信治 携帯：090-3156-5268

メール：takama2nibu3@yk.commufa.jp

近藤 政仁 携帯：090-2183-8125

メール：vft55ud55@gmail.com

倉橋 智司 携帯：090-8673-7180

メール：ilyt6by8@qc.commufa.jp

池戸 美恵 携帯：090-1294-0415

メール：noboruonna@icloud.com

川崎 禎明 携帯：090-2131-7695

メール：y.kawa715@gmail.com

林 康太郎 携帯：090-2949-0544

メール：koutaropippi@gmail.com

会 務 報 告

【2024 年 9 月常務委員会】

日時：9 月 26 日(水) 19:00～21:00

1、支部長挨拶（高橋）

- ・インド・ヒマラヤ隊より連絡がありレーに入ったとのこと、応援していきたい。
- ・山田利行さんは、比較的元気でハイキングが出来る状況。山梨県北杜市に住まわれている。
- ・今週はゴザフェスがありますので、楽しみにしている。

2、総務委員会（今津）

- ・入会者は4人あった。
- ・新年会の案内も東海支部メールシステムから、10月電子メールにて案内する予定。
- ・メールが届かない方には、往復はがきで案内。
- ・6月27日、遭難対策委員会へ作成途中のホームページを説明。次回は山行委員会へ説明。
- ・新年会は、令和7年1月19日に今池ガスビル（名駅東ツドイコへ変更）で実施予定。新年会費用計上は承認された。
- ・未成年者等の参加同意書について、山行委員会の稲葉委員長とは事前合意した。電子メールにて、本人および保護者より参加同意書を提出いただく。未成年者等の参加同意書は、宛先「日本山岳会東海支部高橋玲司」を記載し実施する。

3、会計（奥山）

- ・会費滞納者が35人。再度お知らせする。

4、愛知県山岳連盟（星・鈴木絵美子）

- ・JMSCA（公益社団法人日本山岳・スポーツクライミング協会）大幅な赤字のため、再度出資のお願いがきている。出資については他支部の動向を調査する。

5、支部友委員会（金谷）

- ・夏山は、7件計画であったが天候不良などにより4件のみ実施した。
- ・朝明ミーティングは、物価高により食材の見直しをする。

6、山行委員会（大西(代理)）

- ・山行報告は、雨中止が多くありません。

7、亀の会（鈴木）

- ・月例山行「乙女溪谷」2～3日前に遊歩道が崩れて急遽付知峡へ変更。はじめて使用したマイクロバスは、運転者付きでお値打ちであった。
- ・富士山登山山行が8月24日「中日新聞」へ掲載され、1名入会申込みあり。

8、猿投の森づくりの会（和田）

- ・猿投で日本山岳会の所有地、境界を確認する作業を実施した。

- ・JAC 研究施設で「上高地国有林の歴史と保全」の研修会として、林野庁中信森林管理署井口署長の講演と治山現場など視察した。

9、アルパインクラブ（高橋）

- ・会員数も増えたので、装備の（ザイル・テント等）買い足しをした。
- ・現在、39名。指導員の確保が課題である。

10、東海学生山岳連盟（山下） 第12回ゴザフェス開催 9/28～9/29 約40名が参加。

11、登山学校（前田）

- ・9月予定の山行は、すべて実施した。

12、自然保護委員会（石原）

- ・9月30日、猿投山山行、ナタ、鋸を持参して実施予定。

13、ボランティア委員会（前田）

- ・ボランティア委員会としてオハイ合宿を実施、蒸し暑くバテバテ登山でしたが無事終了。
- ・秋のボランティア委員会行事、「秋のSON・山岳会と一緒に登山40名」「秋のブラインド登山40名」「親とこのふれあい登山教室100名」。
- ・「秋のひまわり登山」「もりなり親睦合宿」（視覚障害者4名）、さらに「秋のタンポポ登山」。
- ・瀬戸少年院への取組みとして、11月14日猿投山で1名の卒院行事として道案内対応する。
- ・猿投の森づくり20周年記念行事として、山田さんが楽器演奏される。

14、遭難対策委員会（高松）

- ・8月登山届出は、54件あり。
- ・新HPの遭難対策委員会の遭対ページについて、総務委員会デジタルメディア担当より説明および意見交換を行った。

15、写真展実行委員会（岩月）

- ・11月7日写真教室「講師：大島隆義氏」開催予定。

- ・2025年2月25日～3月2日市民ギャラリー写真展開催予定。10月から作品募集を始める。

16、技術向上委員会（清水）

- ・11月24日『リスク軽減につながる登山計画の立て方、読み込み方』講習会を実施する。
- 出席：高橋、今津、前田、石原、和田、高松、岩月、鈴木、山下、奥山、大西

zoom：金谷、清水

【2024 年 10 月常務委員会】

日時：10月23日(水)19:00～22:00

1、支部長挨拶（高橋）

- ・インド・ヒマラヤ登山隊登頂成功（隊長、星氏）。
- ・猿投の森づくり20周年記念のイベントを予定している。盛大に盛り上げたい。
- ・岐阜県、揖斐の小島山（おじまやま）の活動を次年度から東海支部として後援したい。神社仏閣が多く歴史豊かで魅力のある山である。

2、総務委員会（今津）

- ・一人退会、6名入会手続き中。
- ・年次晚餐会12/7(土)の参加希望者は今津まで連絡。
- ・梶田民雄氏から書籍、装備が寄贈された。石田文男氏に本の整理を依頼。
- ・令和7年新年会、1/19(日)ツドイコ名駅東で開催。インド・ヒマラヤ登頂報告と講演松田宏也氏。懇親会はチカマチラウンジマメゾン6,500円/人。案内は基本的に電子メールで伝える。東海支部メールシステムを基本利用する。支部報にて通知。

3、愛知山岳連盟（星、鈴木絵美子）

- ・JMSCA（公益社団法人日本山岳・スポーツクライミング協会）出資協力の要請があった。改善計画を確認して常務委員会で図る。

4、インド・ヒマラヤ登山隊（星）

- ・9/20、6名でメラック6481m登頂。令和7年新年会で報告。

5、支部友委員会（金谷）

- ・10/26～10/27の朝明ミーティングを予定しているが天気不安定のため中止の可能性有り。

6、山行委員会（稲葉）

- ・12/8金華山忘年会山行。山行後懇親会を予定している。アルパインクラブと山行委員会では実施予定をしているが他の委員会もぜひ参加歓迎。参加希望者はHPから申し込みができる。ブラインド登山者も参加できる。
 - ・築谷山に萩原侑紀さん（中学生）参加され参加記の原稿を書く。
 - ・山岳保険について。JR0会員は山岳保険に該当しないため山行委員会の山行の参加は断る。支部山行ホームページの備考欄に山岳保険に入ること、JR0は不可と記載していく。
- ### 7、猿投の森づくり（和田）
- ・20周年記念誌、経費42万円程。会員、森づくり関係者、執筆者、支部員希望者に配布。
 - ・特定非営利活動法人アクスネット（環境教育

をしている団体）から講師派遣依頼があった。

8、トレッキングクラブ

- ・10/26(土)太尾山～佐和山（滋賀）中止。
- 11/7(日)倶留尊山。

9、東海支部報（星）原稿締切日は11月末。

10、アルパインクラブ（高橋）

- ・10代～20代の参加者が多く、41名。

11、東海学生山岳連盟（山下）

- ・ゴザフェスについて。大きなトラブルなく実行できた。総会は12月18日予定。

12、登山学校（服田）

- ・机上講習、11月24日(日)【装備 冬山編】講師 千葉泰丈氏、【山岳遭難の現実】講師 小古真也氏、【登山計画の立て方・読み取り方】講師 清水克宏氏 技術向上委員会
- ・山岳遭難対策制度 JR0 に加入の受講生は山岳保険に切り替えるよう指示。

13、自然保護委員会（石原）

- ・愛知万博20周年で11/6(水)海上の森、物見山登山。

14、ボランティア委員会（前田）

- ・10/12 SON 鳩吹山。10/14 ひまわり登山母袋烏帽子岳。10/19～20 ひまわり登山もりなり合宿、鍋倉山。11/1 タンポポ登山。11/3 ブラインド登山。11/9 親と子の登山教室。

15、遭難対策委員会（高松）

- ・10/6 レスキュー訓練 10:00～11:30 いなべ消防署、救急法講習会、費用 4,475円ロープ500円。
- ・11/1 リスク先読み座学 11/3 リスク先読み検証登山。

16、写真展実行委員会（欠席）

- ・資料の通り

17、技術向上委員会（清水）

- ・11/24(日)登山計画の立て方・読み取り方
出席：高橋、今津、服田、前田、高松、石原、和田、星、鈴木絵美子、山下
(ZOOM) 金谷、稲葉、清水

【2024年11月常務委員会】

日時：11月27日(水)19:00～ 支部ルーム

1、支部長挨拶

- ・最近の数か月はゴザフェスに始まり各委員会もそれぞれにイベントが続き、盛大に開催、終了出来たことは皆様の活躍にあってこそ感謝申し上げます。次年度に向けての活動も始まってくる事と思いますが、常務委員会の中でも情報共有をしながら各委員会が連携をとって進めて行けるようご協力をお願いします。

2、総務委員会 今津

- ・入退会(入会) 6名 手続き中 1名(退会) 3名
- ・年次晩餐会出席者 9名
- ・デジタルメディア委員会:新ホームページ開設は予定より遅れる見込み、メールシステムに登録するマスター名簿を整備中。
- ・新年会案内について、メール登録されているかたにはメールにて詳細を案内済。

3、県岳連 星

- ・JMSCA 基金への出資について 総会に諮ったうえで JMSCA 基金に出資を予定。

4、支部友委員会 金谷

- ・10月、11月の山行は雨天中止以外無事終了。朝明ミーティングについても天候が心配されたが無事終了することができた。

5、山行委員会 稲葉

- ・12/8 実施予定の金華山忘年山行参加者は現在のところ「支部山行参加申し込み」からの参加者は20名+アルパインクラブとなっています。

6、亀の会 鈴木

- ・会員動向 入会 3 退会 0 総数 54名(11/1 現在)
- ・山の保険 JIRO について内容確認 全ての遭難救助費用が対象とはなっていない。

7、厳冬期北アルプス主脈全山縦走計画について 草野

- ・期間 2025年1月末～3月初めの週 ルート 日本海側親不知～穂高 過去成功者 1名でかなり難易度は高い計画です。全食糧を担う体力もつけ、難しい場所はロープを用いて安全に留意した行動をとることで成功できると考えています。登頂後はSNS・YouTube・X等で東海支部の宣伝を行うつもりです。装備や消耗品について支援をお願いします。

*チャレンジ基金より支援金を支出する(承認)

8、猿投の森づくりの会 和田

- ・10月11月と行事も多くその中に20周年周年記念集会も含まれる。詳細は資料の通り

9、トレッキングクラブ 服田

- ・会として大きな動きはない。猿投の森づくりの会の餅つきは有志の個人参加となる。

10、支部報 星

- ・第180号について 12/26 発送予定のため原稿は11月末とします。

11、アルパインクラブ 高橋

- ・登録数 41名 常に活動しているのはおよそ10人程度 19歳～54歳

- ・広島でのユース交流会 8人参加。東海支部に関してはゴザフェスを交流会と位置づけ、9月に本部や広島を招いて行いたい。
- ・草野君の縦走計画・2年後デナリのカシンリッジへの計画等を予定している。

12、東海学生山岳連盟 山下

- ・冬山計画内容について
- *OB 等をアドバイザーとして意見を聞くこと。
- ・秋の総会 12/18 19:30より 支部ルームにて *総会時に梶田氏より寄贈された装備品を学生に配布する。

13、登山教室 服田

- ・11月、12月は学校運営は粛々と行われています。11/24の机上講習会には41名の参加。

14、図書委員会

- ・梶田氏の寄贈いただいた書籍は支部で保存、新年会会場にて販売の予定。

15、ボランティア委員会 前田

- ・秋の公式行事は無事終了。瀬戸少年院在院の少年・職員5名との山行は初めての企画。

16、遭難対策委員会 高松

- ・登山届提出数66件うちチェック表添付57件。

17、写真展実行委員会 岩月

- ・11/7 初めて外部の講師を招いて写真教室を実施、12名参加。参加者へのアドバイスとスマホでの撮影について機能の紹介等講義を受けた。

- ・写真展開催に向けて作品募集中。期間 2/25～3/2

18、技術向上委員会 清水

- ・11/24 『登山計画の立て方+読み取り方』講習会を登山学校とタイアップして実施。
- 出席者:高橋 今津 前田 山下 服田 岩月 高松 星 鈴木 清水 稲葉 金谷 清水 和田 奥山

ル ー ム 日 誌

—・— 9月 —・—・—・—・—・—

大会議室 /小会議

- 1(日) トレッキングクラブ
- 2(月) 支部友委員会
- 3(火) 県岳連
- 4(水) アルパインクラブ(青年部)
- 5(木) 写真展実行委員会
- 7(土) 登山学校机上講習会
- 9(月) 登山学校運営委員会
- 11(水) 山行委員会
- 12(木) 自然保護委員会
- 13(金) 猿投の森づくり自然観察会

16(月) 図書委員会・読図会
 17(火) ボランティア委員会
 18(水) 東学連 /技術向上委員会
 19(木) 正副支部長会議/総務委員会
 23(月) /支部友読図会
 24(火) 遭難対策委員会
 25(水) 常務委員会
 27(金) 亀の会
 —・— 10月 —・—・—・—・—・—

1(火) 県岳連 /TNCC
 2(水) アルパインクラブ(青年部)
 3(木) 写真展実行委員会
 7(月) 支部友委員会
 8(火) 支部友ミーティング
 9(水) 山行委員会
 10(木) 自然保護委員会
 14(月) 図書委員会・読図会
 15(火) ボランティア委員会
 16(水) 東学連 /技術向上委員会
 17(木) 正副支部長会議/総務委員会
 18(金) 登山学校運営委員会
 20(日) 登山学校机上講習会
 21(月) 支部友読図会
 23(水) 常務委員会
 24(木) 総務委員会(合同)

29(火) 遭難対策委員会
 —・— 11月 —・—・—・—・—・—
 3(日) トレッキングクラブ
 5(火) 県岳連 /TNCC
 6(水) アルパインクラブ(青年部)
 7(木) 写真展実行委員会
 11(月) 登山学校運営委員会
 12(火) 支部友委員会
 13(水) 山行委員会
 14(木) 自然保護委員会
 18(月) 図書委員会・読図会
 19(火) ボランティア委員会
 20(水) 東学連 /技術向上委員会
 21(木) 正副支部長会議/総務委員会
 22(金) 亀の会
 24(日) 登山学校机上講習会
 25(月) 支部友読図会
 26(火) 遭難対策委員会
 27(水) 常務委員会

18(月) 図書委員会・読図会
 19(火) ボランティア委員会
 20(水) 東学連 /技術向上委員会
 21(木) 正副支部長会議/総務委員会
 22(金) 亀の会
 24(日) 登山学校机上講習会
 25(月) 支部友読図会
 26(火) 遭難対策委員会
 27(水) 常務委員会

会員異動

入会：土居竹美(15541) 中畑岳登(17351)
 山崎悦美(17349) 駒田幸枝(17350)
 中島廣子(17355) 錦見 輔(17337)
 退会：横井公享(16484) 吉木洋二(14767)
 束村緑子(16670) 後藤希介(17068)

INFORMATION

【総務委員会からのお知らせ】

令和7年新年会を以下のように開催いたします。
 皆さまのご参加をお待ちしております。
 日 時：令和7年1月19日(日)
 13:00開場、13:30開始
 場 所：三交不動産ビル2階 ツドイコroom G
 名古屋市中村区名駅3-21-7
 052-756-2217

主な内容：

第一部 報告会(13:30～) 無料
 ・インド・ヒマラヤ 報告会
 ・松田広也氏 ミニヤコンカ奇跡の生還
 第二部 懇親会(17:00～)
 会 費：6,500円(お食事代等)
 場 所：Beer Bar Ma Maison (マメゾン)
 名古屋市中村区名駅4-4-10
 名古屋クロスコートタワーB1
 チカマチラウンジ店(講演会場から徒歩5分)
 総務委員長 今津 英一朗

【写真展実行委員会からのお知らせ】

第19回東海岳人写真展を開催します
 テーマ [山とつながる よろこび]
 開催期間 2月25日(火)～3月2日(日)
 開催時間 午前10時から午後5時
 展示会場 名古屋市中区 市民ギャラリー栄
 7階 第1・2展示室
 東海支部コーナーを設置して広報啓発活動
 も行います。皆さまお誘いの上ご来場ください。

写真展実行委員長 岩月 邦文
 編集後記

あけましておめでとうございます。
 東海支部報を紐解くと、海外遠征はヒマラヤ
 のジャイアンツ攻略の先陣争いがありました。
 その後インド・ヒマラヤ等の地域研究が盛ん
 に行われ、記録が追加されてきました。同様に各
 委員会発足し、その活動は、継続と改善を重ね
 てきました。
 今年も、各委員会が継続と共に新たな試みが
 出来ることを期待しています。 星 一男

SINCE 1975
mont-bell

地球と遊ぶ、時間をつくろう



登山用品は、お近くの「モンベルストア」へ！ 最新情報は
こちらから

名古屋栄店	052-228-1840
豊橋店	0532-21-8650
長久手店	0561-64-2605
ららぽーと名古屋みなとアクルス店	052-659-2708

株式会社 **モンベル** www.montbell.jp

法務相談は行政書士にお任せください！

相続 会計 許認可

1時間無料相談

あなたの不安を解決に導きます
遺言書、遺産分割協議書、
法定相続情報一覧図作成、任意成年後見の相談など



西山行政書士事務所 ☎052-961-6506
名古屋市中区丸の内3-21-21丸の内東桜ビル1004
www.nygs-office.com 久屋大通駅 徒歩1分

「東海支部報」では、
広告を募集しております

表4(裏表紙)掲載

※掲載のご希望・お問合せは
jactokai107@gmail.com まで

***** OMC *****

住いのコンサルタント

(有) 富士見企画

〒460-0014
名古屋市中区富士見町8番8号

オフィスに関する悩み事、丸天産業が全て解決します。

ファシリティマネジメントによるオフィス構築や
デザイン、インテリアやセキュリティなど
オフィスのすべてが揃っています。

オフィスのお困りごとを丸がかえでお応えいたします。



郵送無料 **Honesty**
コンサルティング事例集

オフィスに關するお悩み事の解決事例が載っています。
お申込みは下記までお電話ください。

株式会社 丸天産業
本社 〒460-0008 愛知県名古屋市中区栄5丁目10-34
TEL: 052-241-3686 FAX: 052-241-0457

 **印刷全般**
ご相談ください

(有) アジマプリント

〒462-0015 名古屋市中区中味錦二丁目438番地
TEL(052) 901-1256
FAX(052) 901-2278
E-mail: ajimaprint@giga.ocn.ne.jp